
CAGE - 籠の中の記憶探偵 - 《日常編》

白城海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CAGE - 籠の中の記憶探偵 - 《日常編》

【Nコード】

N9023Y

【作者名】

白城海

【あらすじ】

「人が 死んでる？」

ある日学校で死体を発見してしまう主人公、天海慶次。
震える彼に向かい、幼馴染の風間祈衣は宣言する。

「高校生探偵の出番ね！」

そう言いながら携帯電話を取り出し通報する祈衣。

「通報かよ！？探偵はどこに行った！探偵はッッ！」

自称高校生探偵の幼馴染。主人公にベタボレの中二病の後輩。毒を吐くけど兄思いの妹。変態でブラコンの兄。

そんな奴らとのドタバタの日常に紛れ込んできた《非日常》

一体、学校で何が起きたと言うのか。

推理をしないで通報をする探偵と、記憶障害の青年の、記憶を巡る
ミステリ&ラブ・コメディ(?)

第#話 遺書と、死

僕が殺した。

彼を殺した。

ずっと、ずっと勉強ばかりしてきた僕が彼の命を奪った。

僕が殺した。僕たちが殺したんだ。

今でも思い出せるよ。彼の体を吊り上げた、あの感触を。

人間の体重がのしかかったロープの重さを。

恐れと、罪悪感と、背徳感。

興奮と、恍惚感と、高揚感。

そう、気持ち良かった。ゾクゾクしたんだ。

腕にのしかかる重さも、清濁全てが入り混じった感情も、全てを

僕は快感に感じたね。

だけど、もう僕はおしまいだ。

今までやってきた全てが。何もかもがおしまいなんだ。

努力も、

勉強も、

優等生のフリも、

全部無駄に終わったんだ。

僕が彼を殺したから。アイツが死んでしまったから！

高校は退学処分でしょう。

まともな大学にはもう行けないでしょう。

就職だって、普通に会社は人殺しを雇ってくれるわけが無い。

もう、全部めちゃくちゃ。やってられない。

梶原君が死んだから悪いんです。僕が殺したから悪いんです。

もう、何も考えたくない。

未来も、夢も、何もない。

僕は負けた。捕まったから負けた。負け犬だ。

負け犬の人生なんていらぬ。クソみたいな人生なんて俺には必要ない！

だから、僕も梶原君と同じ所に行きます。

さようなら。

第一話 俺と死体と女子高生探偵

「六月四日。十六時三十分。私立平坂高校 音楽室」

唐突だが聞いてほしい。

『音楽室の扉を開いたら人が死んでいた』。

目の前の出来事に俺 天海慶次は心の奥底から恐怖し、絶句していた。

六月初旬とは思えないほどの暑さ。

吐きそうなほどの熱気。

体中に張り付く湿気。

体の至る所から汗が噴き出すのを感じる。

暑さからの汗では無い。

氷のように冷たい汗 恐怖からの、汗。

手が震える。

寒気が全身を覆う。

「夢、だ。夢を見てるんだよ。俺は」

ゆっくりと目を閉じ、そして開く。

目に映るのは天井から延びたロープ。そしてだらしなく垂れ下がった男の四肢。

もちろん足は宙に浮いている。

首の骨が折れているのだろうか。死体は奇妙な角度で首を垂れ、上目づかいとも言えるような顔を俺の方に向けていた。

コイツは夢じゃない。間違いなく現実だ。

「は…は」

現実から逃れようと乾いた笑いが口から洩れた。

だがそんな笑いは死体と目が合った瞬間に止まってしまふ。

今にも眼窩がんかからはみ出しそつに飛び出た、それでいて暗く光の無い瞳。

その瞳が俺をじつと見つめているかのように見えた。

足が、動かない。

首が、動かない。

このまま死体に魂を引きずられ俺も死んでしまうのではないだろうか。

混乱が妄想を呼び、妄想が錯乱を引き出し、意識が遠くなる。

その時だった。

「どうしたの、ケージ？」

聞きなれた女の声が引き金となり、ようやく俺の体が硬直から解き放たれた。

ただし抜け出せたのは首だけ。

後ろを振り返ると見慣れた女の顔。

《風間祈衣》だ。

小顔で化粧気が薄く、色白で整った顔立ち。快活さを象徴するか

のようにぴんと外側に跳ねたミディアムロングの癖っ毛。猫を思わせるやや釣り上った大きな瞳。

その瞳が俺の顔をじっと覗き込んでいた。

「人が……死んでるんだよ」

教室の死体を指差し、伝える。手が震えているのが自分でも分かった。

俺が指を向けた方向を風間が見る。一瞬、目を見開き絶句。常識的な反応だ。

だが、彼女が続けた言葉は常識的とは正反対のものだった。

「困ったわね。このままじゃ練習できないわ」

「そう言う問題か!？」

思わず叫ぶ。変わり者だと言う事には気付いていたがここまでとは思わなかった。

「文化祭まで後3カ月。部員もわずか3人なのにどうしよつか……」

「いや、どうしよつか……じゃねえだろっ!」

「しかも、もう一人の部員なんてまだ来てないし……」

「まあ、黒川は遅刻常習犯だからな。ってそうじゃない!死体だよ!死体!」

2学年下の後輩の顔が一瞬、目に浮かぶ。だがそんな事は今はどうでもいい。

問題は俺達の目の前に死体がある、と言うことだ。

「冗談冗談。分かってるわよ。高校生探偵の出番って言いたいんでしょ?」

叫ぶ俺に対し、風間が現実離れした奇妙な発言をした。

高校生探偵。

風間祈衣と言う女はミス터리やサスペンスものが大好きで、ことあるごとに探偵を自称している。

事実、校内の出来事に限って言えば定期テストの順位から同級生の三角関係の内部事情まで完璧に把握しているらしい。俺に言わせれば探偵と言うよりはワイドショーだが。

「あたしのカンが言ってるの。この事件は殺人の可能性があるって」とんでもない発言だった。

それも真顔で、真剣に。俺の瞳を真っ直ぐに見据えて。

風間は思いつきをそのままノリと勢いで口に出す女だが、今回はかりは冗談ではなさそうだった。

「可能性って事は、自殺じゃないかもって事か？」

「そう、これは音楽部創立以来の天才ボーカリストであり、高校生探偵であるあたしの出番に違いないわ。推理漫画の王道よ」

首吊り死体を指差し、風間が嬉しそうに声を弾ませる。死ねばいいのこ。

「はあ、仕方ないな。期待してやるよ。お前の実力って奴に」

「任せて！あたしの歌で世界を変えてみせるわ！アタシの歌を聞けえっ！」

「そっちは欠片も期待して無えよバカ！探偵の方だ、探偵の方！」

思い付きをそのまま口に出しただけだった。コイツは俺の想像を

裏切る事が趣味なのか。

「仕方ないわねー。じゃあ、まずさしあたってする事、それは」

風間がおもむろにポケットから携帯電話を取り出し、キーを操作する。現場を画像に残すつもりなのだろうか。

慎重な操作。そばで見ている俺にでさえ緊張感が伝わってくる。一体何をすると言うのだ。

長いようで短い時間。

俺の視線を気にしてかせずか、風間はおもむろに携帯電話を耳にあてた。

「あ、もしもし。警察ですか？高校に死体があるんですけど…はい、場所は」

「通報かよ！？高校生探偵はどこに行った！常識すぎて予想外だよチクショウ！」

「市民の義務じゃない。何を言ってるの？」

「探偵だったら推理しろ！」

「警察に任せた方が確実だし？通報は趣味みたいなものだし」

「ウサ美ちゃんかお前は！！」

名探偵じゃなかったのかお前は！？

「別に推理しなくても死ぬわけでもないし」

「いつそ死ねよ」

「それに、電話中なんだから邪魔しないでよ。警察の人困ってるじゃない」

「俺のせいか！？俺のせいなのか！？」

理不尽だ。あまりにも理不尽だ。

「……ったく。いつもいつもバカみたいなことばかり言いやがって。少しは俺のストレスを」

「でもさ」

ぶつぶつと呟く俺の愚痴を、通報を終えた風間が遮った。

「震え、止まったわよね？」

にこり、と俺を瞳を覗きこみ微笑む風間。

そう、彼女の言った通り、いつの間にか俺の体の震えは収まっていた。

「はぁ」と嘆息し諸手を挙げての降参する俺。

そんな俺を見て、妙に勝ち誇った顔が癪に障ったのでとりあえず「死ね」と罵倒しておいた。

第一話 俺と死体と女子高生探偵（2）

「警察が来るまで少し時間がかかるみたいよ」

携帯電話を閉じた風間が俺に向かい言った。声色には怯えも動揺も感じられない。つくづく大物だと思う。でなければ突き抜けた馬鹿だ。

「警察が来る前にやることがあるの」

「やること？」

確かにそうだ。職員室に教師を呼びに行かないといけない。それに、野次馬が来ないように見張りも必要だろう。いくら人通りの少ない放課後の音楽室と言えど、誰も通らないとは言いがたい。

「意外と考えてるんだな。で、お前は何かからするんだ？」

「もちろん死体の観察よ！殺人事件なんて初めてだからよく見ておかなくちや」

「お前が野次馬かよっ！死者を冒瀆しやがって！」

「そんなつもりは無いわよ！」

怒鳴る俺。怒鳴り返す風間。冒瀆するつもりはないと言いつつ携帯電話のカメラで写真を撮っているのは何故だ。

「完ッ全に興味本位の野次馬じゃねえか……」

頭を抱える俺をよそに、風間はひたすらに死体を観察し写真を撮り続けていた。

職員室に行こうとも思ったが、今の風間の姿を誰かに見られたらとてつもなく面倒な事になりそうなので見張りをする事に決める。

殺人の共犯者が俺は。

「本当にこんなヤツが俺の幼馴染なのか…？」

昔の俺に友人は選べと説教してやりたい気持ちになり深く嘆息。すると今まで無言で死体を調べていた風間が口を開いた。

「見た所、自殺かな。服の乱れが無い。気になるのは衣類に付着した白い粉、かなあ」

「白い粉？」

「うん。何だろ。校舎のカベ、なのかな」

「何でそんなモンが服につくんだよ」

ちらり、と一瞬だけ死体の方を見る。六月の暑さの中、何故か死体は長袖を着ていた。彼はどうして夏服を着なかったのだろうか。

「それを調べるのが警察の仕事じゃない。何言ってるの？」

「やかましいわ！この口だけ名探偵」

「口だけって。人の夢を馬鹿にするなんて最低ね」

「俺が最低ならお前は人間のクズだよ！死んで死体に詫びる馬鹿っ
！」

天井から垂れた物体を指差し、怒鳴る。見慣れない顔。何年生だ
ろうか。

「ところで、こいつは誰なんだろうな？」

顔の広い風間なら知っているかもしれない。素直に疑問を口に出
す。すると風間は目を見開き、

「ケージだったら、《忘れ》たの？隣のクラス、A組の梶原君よ。梶
原正明」
わじまのあき

呆れたような顔で言った。隣のクラス？聞き覚えが無いぞ。

「まさか？A組との体育は合同だ。それなのに顔も名前も思い出せ
ない？そんな馬鹿な事」

ありえない。普通に考えればありえるわけが無い。

だが、俺は《普通》じゃない。思い当たるフシがあるのだ。

汗が再び体中を覆う。

同級生、それも隣のクラスの生徒を見て顔も名前も出てこない。
そんな《異常》が、俺にはありえるのだ。

混乱し、目を白黒させる俺に構わず風間が言葉を続ける。

それは、余りにも衝撃的な言葉。常識外れの言葉。

「それどころか、あたしとケージは梶原君の話をしたわよ？今日、
昼休みに」

「え？」

トドメのように放たれた彼女の言葉に俺は目の前の死体の事も忘
れ、呆然と立ち尽くすしかなかった。

.....

「六月四日 午後九時三十分 天海家」

警察の事情聴取は思っていたよりあっさりしたものだだった。

ドラマで見たような《第一発見者が犯人扱い》などと言う事もなく穏やかに終える事が出来た。

梶原正明を《忘れ》ている事も、風間や担任が《事情》を説明してくれたため問題にはならなかった。

「それでは、また署に来てもらう事になると思いますので」「分かりました」

私服警官の言葉に頷き、覆面パトカーから降りる。風間とは警察署前で別れた。

網島あみしま駅えきから徒歩十分。二階建ての白い一軒家。それが俺の家だ。リビングに明かりが灯っている。両親とは連絡が取れなかったので、家に居るのは妹だろう。

「ただいま」

「おかえりなさい。遅かったですね」

リビングに入った瞬間、キッチンでお茶を淹れていた妹の美鳥みどりが満面の笑顔で振りかえった。

ほっそりとしたシルエツト。背中まで伸びたさらさらで瑞々しい黒髪。

時には小学生にも間違われるほどの童顔。

大きな瞳に長い睫毛をぱちぱちとさせ家族の帰宅に喜ぶ姿はまるで小動物の様。

顔つきと雰囲気のせいか、年齢にそぐわないクマのキャラクターで揃えられたエプロンとスリッパがが妙に似合っている。

この様子を見てこいつが一応高校生。俺と同じ学校の一年生だと言っても誰も信じないだろう。

「ちょっと色々あって」

「色々？」

二人分の冷茶をトレーに載せ、テーブルへ向かう妹が疑問の声を上げた。

「ちよつと警察署に行つてさ。無茶苦茶疲れたんだよ。聞いてなかったか？」

鞆を床に放り投げ、椅子に腰かけ、そのままダイニングテーブルに突つ伏す。自室に荷物を置いて制服から着替える^{フレザー}気力は残っていないかった。

「…つて、あれ？」

美鳥からの返事が無い。

不審に思い、伏せていた顔を上げる。

目の前には彫像のように微動だにしない妹がトレーを持ったまま固まっていた。

がしゃん。

直後、ガラスが碎ける派手な音が室内に響いた。

トレーに載せていたガラスが滑り落ちたのだ。

「どうした！大丈夫か？」

飛び散ったガラスの破片を確認する。ガラスは描かれていたキャラクターの原型を残さない程、無残に飛び散っていた。

割れたガラスは妹が何よりも大切にしていたガラスだった。

俺が修学旅行の時に、デイズニールランドで買って来たお土産。

少し値が張ったが、ミツキーマウスが大きく印刷されたこのガラスを妹は非常に気に入っていた。

その宝物の様に大事にしていたガラスを落とし、割ってしまうほどの衝撃が俺の言葉の中にあっただらうか。

考えても埒が明かない。頭を振り、慌てて椅子から立ち上がり駆け寄る。

幸いにも彼女に怪我はなさそうだ。

だが、様子がおかしい。美鳥は床に崩れ落ち、青ざめた表情で小刻みに震えていた。

「兄さん…」

「どうしたんだ急に。具合でも悪いのか？」

倒れこもつとする美鳥を抱きとめる。床にはガラスの破片が散らばり危険極まりない。

呼吸を調べる。怯えるような荒い呼吸。心に不安がよぎる。

だが、次の瞬間に彼女が放った言葉は予想外にも程があるものだった。

「…自首しましょう。私が一緒に付いていきますから」

心配して損した。

「何でだよ！？警察から帰ってきたって言ったのに、どうしてソコから自首になるんだ！」

「逃げてきたんですね。大丈夫です。例え兄さんがクズ以下の犯罪者だったとしても私だけは兄さんの味方ですから」

「問答無用で犯罪者扱いしてる時点で味方もクソも無いだろうがっ」

「そ、そんなに怒るって事は」

ようやく納得してくれたのか、涙を止め顔を上げる美鳥。どうやら誤解は解けたようだ。

「本当に何か悪い事をしたんですね。人間は凶星を突かれると怒るって聞きますし」

「どっつしてそうなるんだ!？」

結局、美鳥の誤解を解き終えるまでに、俺は十分以上の時間を費やす事になったのだった。

.....

「に、兄さんは何もしてないんですか？」

リビングのソファーに並んで説得すること約10分。

ようやく美鳥が俺の話の信じてくれた。

「当たり前だろ」

「《忘れ》てるだけじゃなくて？」

真顔で見つめ、尋ねる美鳥。

ずきり、と胸が痛む。

《忘れる》。胸に刺さるその言葉を無理矢理に振り払い、笑顔を作り答える。

「いくら俺の物忘れがひどくても、それが原因で警察沙汰なんてありえないだろ？」

常識でモノを考えてほしい。

たかだか物忘れで警察沙汰なんて起きるわけ

「先週、母さんが兄さんの身柄を警察署に引き取りに行きましたけど？」

「覚えてないな」

本当は覚えてるけどな。

「その顔は覚えてますよね！またケンカですか？」

一瞬でバレてしまった。さすが家族と言っべきなのだろうか。

「また…っってお前。俺が年がら年中ケンカしてるみたいなの言いは止めろよ」

「それはそうですね…。やっぱり心配ですよ」

顔を伏せ、今にも泣き出しそうな表情になる美鳥。

心配なのは俺の身の事だろうか。

それとも、俺の《障害》の事だろうか。だが、どちらにせよ

「慣れるしかないだろ。どうしようもないんだから」

諭すように良い、頭を撫でる。そう、慣れるしかないのだ。

「うう、そうですね…。でも、ケンカじゃないならどうして警察に？」

目をぬぐいながら美鳥が俺に問いかける。

「ああ、それは人が死ん」

「自首しましょう」

何でだよ。

「だから真顔は止めろっ！せめて全部言わせる…ってオイ！電話を取り出すな！110番通謀しようとするな！お前は風間か！？」

携帯電話を取り出した美鳥の腕を体ごと抑え込む。

「に、兄さん。ちょっと…」

美鳥が慌てたような声を出す。

お互いの息遣いが届く距離。見る見るうちに彼女の顔が真っ赤になる。

何を意識しているのだろうか。兄妹だと言うのに。年頃の女子の考える事は分からない。

慌てふためく妹から携帯電話を奪い取り、距離を取る。

通報が無理だと悟ったのか、ようやく落ち着きを取り戻し美鳥が口を開く。

「だって、兄さんがとうとう人を殺すだなんて」

「殺してない！自殺だ…と思う」

自信は無い。だが、警官の話では恐らく自殺ではないかとのことだった。

もちろん、警官の言葉が俺達を安心させるための《優しいウソ》と言う可能性もあるのだが。

「本当に、本当に、ですか？」

「本当だ。俺は無関係だ」

じつと、見つめ合う。

美鳥は少しだけ想像力が豊かすぎる少女だ。

その為、色々とすぐに誤解してしまう性格だがそれも全て俺の事を心配しての事。邪件には出来ない。

5秒…10秒。

長いようで短い沈黙の後、ようやく美鳥が口を開いた。

「…自分で殺したのを《忘れ》ただけだったりして」

おい。

「お前酷過ぎない？」

「兄さんの妹ですから」

「何も言い返せない」

前言撤回。

コイツは俺を心配しているんじゃない、多分俺で遊んでいる。

「だから話を聞けっつての!」

近所迷惑も考えず、渾身の叫び声を上げる俺。

美鳥に全ての事情を説明し終えたのは、さらに20分の時間を必要としたのだった。

第一話 俺と死体と女子高生探偵(3)

「と、言う訳で事情聴取されてたんだよ」

ようやく落ち着いた美鳥に今日の出来事を説明する。

音楽室で風間祈衣と一緒に死体を発見した事。

その死体が隣のクラスの男子だった事。

俺と死んだ彼とは面識が無い事。

彼の事を《忘れ》ていた事は伏せた。不要な心配をさせてしまう
と思ったからだ。

「良かった。本当に…良かった」

全てを説明し終えた時、どう言う訳か美鳥は涙で顔をくしゃくしゃにしていた。

「変な事件に巻き込まれたりはしてなかったんですね！誰も傷ついたりしてなかったんですね」

その顔を見て、彼女が本当に心配してくれていた事に気づく。

「兄さん…《事故の後遺症》のせいで何度も酷い目に会ってるから…」

「泣く程の事かよ。ほら、涙拭けって」

床に転がっていた箱からティッシュを取り出し、涙を拭いてやる。美鳥が抵抗することはなかった。

「家族が家族の心配をして何が悪いんですか…」

三枚目のティッシュで鼻をかみながら半目で呟く。
高校生にしては余りにも子供っぽすぎる仕事。だが俺は仕方がないと思う。

厳しくするべき父親は製薬メーカーの研究者で家に居つかず、母親も大手居酒屋チェーンの管理職で帰宅は深夜から明け方。

年の離れた兄の大鷹ひろたかが俺達の親代わりのような物だったが、彼は数年前に医者となり、多忙な日々を送っている。

つまり、基本的に家では二人きり。

美鳥は家族の《愛情》に飢えていた。

俺は俺で甘え癖の抜けない妹をどうすればいいのか分からず、小さい頃と同じように面倒を見る。

こうして、自然と甘ったれの子供っぽい女子高生が出来あがる、と言う訳だ。

それでも学校では成績優秀な生徒会役員だと言うのだから信じられない。

「まったく。泣くほど心配するようなことでも無いだろ？どれだけ信用ないんだよ。それに、面倒を見ているのは俺の方」

「週に1回誰かに殴られるようなあざを作り、月に1回学校から両親に呼び出しがかかり、3ヶ月に1回少年課のお世話になるような兄を心配しない方が無理です」

「すみませんでした」

もしかしたら、迷惑をかけているのは俺の方かもしれない。

少しでも普段の行いを反省し、俺は甘えん坊の妹のご機嫌をとる事に集中することにした。

これから《何が起きる》かも知らずに。

午前二時十八分 天海家二階 天海慶二の自室

ふと、目が覚める。

覚醒の原因は《物音》。鍵を開ける音だった。恐らく兄が帰ってきたのだろう。

出迎えても良いが、深夜に俺を起こした事を気に病むかと思い、そのまま目を閉じる。

俺がいるのは二階。リビングは一階。このまま寝てしまえば兄は俺を起こした事に気付かないでいられる。

だが、俺の予想に反して足音は近づいてきた。ぎしり、ぎしりと階段を踏みしめる音。足音を忍ばせようと努力はしているようだが隠しきれるものではない。

階段を踏む音は床を踏む音へと変わり、ゆっくりと近づいてくる。

俺の部屋へと。

不安が、胸をよぎる。

家族が寝ている俺を起こすことなどあり得ない。それだけの《理由》があるからだ。

つまり、足音の主は《家族以外の誰か》。

さもなくば《俺を起こすだけのデカイ事情》があると言うこと。

嫌な予感がする。いや、嫌な予感しかしない。
不審者の可能性も考えていつでも布団から飛び出せるよう身構えた瞬間。

「起きてる？」

兄の大鷹の、吐息のように抑えた声が俺の耳に入った。
不審者では、無い。《何か起きた》？

「大丈夫。起きてたよ」

下手糞な嘘だな、と自分で思う。思い切り寝起きの声だ。

「すまない。入っても良いかな？」

少し高めの、優しいテノール。聞きなれた兄の声。
だが、その声音には深夜に弟を起こしてしまっただけとは思えないほどの重い感情が込められていた。

嫌な予感がさらに膨れる。

「そんな暗い声出さなくて。入れよ」

自身の想像を吹き飛ばすかのように明るい声を絞り出す。

一拍置いた後、ドアが開いた。廊下の明かりでうつすらと照らされた中背の男の姿が見える。

医者の不摂生とでも言うのだろうか。また少し痩せた気がする。

「電気、点けるよ？」

俺の返事を聞くまでもなく兄が蛍光灯のスイッチを押す。
部屋が白い光で満ち、兄の姿をはっきりと映し出す。

切れ長の瞳を細長い縁《ふち》なしの眼鏡で覆い、鬱陶しそうな長髪を真ん中で分けた見慣れた顔。

その表情には、明らかに疲労と困憊の様子が見て取れた。

「死体を見つけたってね？」

思った通りだった。兄が俺に伝えたい事は学校での死体に関する事。

兄の《職業》なら、俺達が死体を発見した事を知っていてもおかしくない。

「ああ。警察から帰って来た時、美鳥が馬鹿みたいに心配してさ。

アイツ、大事にしたたミツキーのグラスまで割って、大げさだよな」先ほどよりもさらに無理矢理に明るい声を絞り出そうとする。

だが、無理だった。俺の声は震えていた。

兄はどう告げれば良いか迷っているかのように目を泳がせている。

だが、俺には分かる。彼が何を言いたいのか。

《検死医の兄》が《自殺か他殺か分からない死体を発見した弟》を深夜に起こしてまで言わなければならぬ事は

たった一つしかない。

「少し、覚悟してほしい」

沈黙を突き破り、兄が告げた。

俺がうなずくのを待ち、続ける。

「彼は…梶原正明君は……」

大丈夫。もう覚悟はできている。

「自殺じゃない……可能性がある」

予想通りの言葉。だが、それはつまり

俺の通っている学校に

殺人犯がいる。

そう言う意味だった。

>> 第一話 俺と死体と女子高生探偵 終

第二話 俺と兄妹と脳障害

「どつ言つ、事だよ」

予想通り。予想通りの展開だった。

だからこそ声を上げずにはいられなかった。

だってそうだろう？

学校で殺人事件が起きたのだ。

《殺人事件》。つまり、犯人が存在すると言つこと。

それも、俺の学校の中に。

被害者は隣のクラスの生徒。

《隣のクラス》。つまり、俺の日常のすぐ側に殺人犯が居ると言うこと。

恐怖を感じるには十分すぎる理由だった。

「勘違いしないで欲しいんだ。まだ殺人事件って決まった訳じゃないから」

兄の落ち着いた声。

「さつき検視に付き合っただ。自殺じゃないけど殺人とも断定できない。それが今日《僕たち》が出した結論だよ」

どつ言つ意味だろうか。首吊りの死体が殺人でなければ何だと言っただ。

兄は大学病院の医師だ。それも普通の医者では無い。

《検死医》。

兄はいわゆる、警察に協力する医者。

細かい事は知らないし、彼も話そうとしない。

守秘義務があるし、犯罪にかかわる話を家族にはしたくないのだから。

「兄貴が担当になったのか」

「うん、この辺の担当はうちの大学だからね。警察から呼ばれて行ってきたんだよ」

兄が言うには、検視には医師の立ち合いが必要らしく、県警から委託された医師と検察が協力して死体 兄が言うには遺体らしいが俺には違いが分からない を調べるらしい。

解剖せずとも、遺体の体温で死亡推定時刻が分かり、外傷の有無で自殺かそうでないかくらいは簡単に判断できるとの事だ。

「解剖はしていないから断定は出来ないけど、一つだけ確かな事がある」

「確かな事？」

「その前に慶次は《自殺》か《そうでないか》の違いは分かる？」

昼間に自称名探偵の風間が言っていた事を思い出す。

確か、あの時は《衣類の乱れがあるかどうか》と言っていた。

だが、その後《乱れなんて直してしまえば分からない》とも。

役に立たない名探偵だなオイ。

「さっぱり分かんね」
素直に降参する。

「簡単な話だよ。《争ったり抵抗したりした形跡はあるか》」
「抵抗？」

「そう、抵抗。絞殺ならばどうしても被害者は抵抗するよね」
確かにそうだ。
紐を首から離そうともがけば手の痕が残るだろうし、犯人と揉み合って血液だって飛び散るかもしれない。

他には、《首吊りと絞殺では首にかかる負荷が違いすぎる》とのこと。

言われてみれば納得できる。全体重が首にのしかかる力の方が、紐が何かで力いっぱい締めつける力よりはるかに強い。

そして何より決定的なのが、《首を絞めた痕跡》と《首をついた痕跡》の両方が残ると言うこと。

科学捜査万歳。現代日本に名探偵は必要ない。

「今回は抵抗などの形跡はなかったんだ。だから絞殺したのを偽装するために首を吊らせた可能性はない」

「じゃあ、自殺じゃないのか？」

首吊り死体が他殺じゃなかったら、自殺の他に何だと言うのだ。
俺が当然の疑問を口にする。

すると、兄は困ったような顔をして。

「いや、自殺と言うには余りにも不可解な事があったさ」と、言った。

「不可解な事？」

「《首への負荷》が大きすぎるんだ」

「どう言う意味だよ？」

話をもったいぶるのは兄の悪い癖だ。俺は早く答えを聞きたいと言っのに。

「まるで、首を縄にかけたまま高所から突き落とされたような感じだね。首がヘシ折れてたんだよ」

昼間の死体の姿を思い出す。

確かに、首が異様な角度に曲がっていた。

「ヘシ…ってどういう意味…だよ」

「分からない。まだ捜査中だからね。今は鑑識さんがあらゆる証拠を集めている所。その辺に関してはあつちの方が専門家だよ。彼らは衣類に付着した髪の毛一本見逃さない。彼らが何かを見つけ出すのを信じるしかないって所」

「…」

「それで、話は戻るけど…さっき言った《確実なこと》。それはね

「

兄の表情が変わる。

泣きそうな、申し訳なさそうな、苦しそうな、心配で堪らないような顔。

「《彼が音楽室で首を吊ったと言うことは、考えられない》」

再び、沈黙。

俺は何を言えば良いのか分からず

兄は俺にどのような言葉をかければ良いのか分からないのだろう。

「…マジで殺人事件？」

沈黙に耐えられなくなり、俺が口を開いた。

「殺人かもしれないし、事故を隠蔽しようとしたのかもしれない。だけど、どちらにしても…」

言葉尻が小さくなっていく。

表情だけで言い辛い言葉だと言うことが見てとれた。

だけど。言わなくても、もう分かっている。

だからこそ喉が渴く。違う。喉だけではなく、舌までがカラカラだ。

冗談だろ？まるでマンガやドラマの世界の話だ。

足が震えている気がする、気のせいだと思いたい。

だけど、兄貴には心配をかけたくなって…。

これ以上、家族に迷惑をかけたくなって…。

「俺の学校に犯人がいるって事だろ？大丈夫だって。気をつけるから」

俺は、強がる事にした。兄に続きを言わず、俺が続きを言ったのだ。

俺の強がり気づいてか気づかずか、兄の顔に少しだけ明るさが見える。戻る。

「あ、そうだ。普通は医者には詳しい捜査情報は滅多なことじゃ回って来ないんだけど、発見者が僕の弟だし、何かあったら大変だから」

らって事で特別に色々教えてもらえる事になったんだ」

兄の無理矢理に捻り出したような明るい話題に思わず苦笑してしまふ。

「心配しすぎだったの。何で死体を発見しただけで俺達に危険があるんだよ」

笑い飛ばしはしたが、本心を言うと殺人犯が同じ学校にいると言う事実は恐ろしいを通り越した物があるのだが、それは口にしない。

「だって、ホラ！ほら、お前が実は決定的瞬間を目撃していて、しかもソレを《忘れた》なんて言う事だったら！」

笑われた事がショックだったのか兄が反論する。

「それはない。今日は球技大会で基本的に誰かと一緒に行動してたしな。1人だった時間なんて15分もない」

今の言葉は事実。担任や風間、クラスメイトから証言が取れている。

だからこそ俺が被疑者扱いされることなく帰宅できたのだ。

「じ、じゃあ実は犯人が偏執的な殺人狂だったら！」

「だったら、とつくに誰か殺されてるだろ……」

「慶次は兄の僕から見ても惚れ惚れするくらいの美形だから狙われなくてもおかしくないよね！」

「『おかしくないよね！』じゃねえよつ。気持ち悪いわ！早く弟離れしろ！このブラコン！」

実はこの兄。過保護である。

両親が不在がちの我が家において、絶対の権力を持つ長男。

彼はその権力の全てを俺達を甘やかす事に注いだ。

お陰で美鳥はいまだに甘え癖が抜けず、俺は俺で弟・妹離れできない兄に辟易している。

「失礼な。僕はブラコンじゃない」

「じゃあ何なんだよ」

ブラコンでシスコンなんて言ったら殴るぞ。そつ心に誓つ。

「ブラコンでシスコぶべらっ！」

殴った。カー杯。

大げさにきりもみ回転しながら部屋の外まで吹き飛んでいくが気にしない。

医者だから大丈夫だろう。根拠はないが。

「三十路のオッサンが堂々とワケの分からん発言をするなっ！…と
もかく、俺も風間も大丈夫だから」

兄も美鳥も風間祈衣の存在は知っている。と言つより家族ぐるみの付き合いらしい。俺はよく知らないが。

「それでも…心配なんだよ。そう、心配な事が《多すぎる》」

いつの間にか部屋に舞い戻った兄が言った。シューティングゲームの残機がお前は。

「多すぎ…る？」

他にもまだあるのだろうか。今以上に心配な事が。

俺の不安を感じ取ったのか、今までになく深刻な表情で兄が口を開く。

「仕事はまだ残ってるのに抜けてきた。怒られちゃう」

俺の不安を返せ。

「『怒られちゃう』じゃねえよっ！お前は女子中学生かつ！いくら童顔でもオッサンが言っている事と悪い事があるぞっ！」

「オッサンって…酷いよ慶次」

「全然！欠片も！1ミリたりとも酷くないっ！事実だよ！いくら20代前半にしか見えなくともオッサンはオッサンだ！このモ1娘世代！」

畳みかける様に言葉を叩きこむ。放っておくとすぐに調子に乗るので性質たちが悪い。

さすがに堪えたのか、急に真顔になる兄。

「どうしたんだよ。急に真剣な顔して」

「…事実と言うのは時に幻想よりも残酷な物だね」

「やかましい。何か名言っぽく言ってもオッサンはオッサンだからな。もうツツコんでられるか。俺は寝る」

ぴしやり、と言い切り布団を被る。

しばらく兄は俺の方を見ていたようだったが、やがて部屋の電気が消え

「おやすみ。気をつけなよ。父さんも母さんも心配すると思うしさ」とだけ言っただけでドアを閉めた。

足音も遠くなり、後に残るのは暗闇と静寂。

「…全く。馬鹿なことばかり言いやがって」
「ただ、その馬鹿のお陰で助かった。少しだけ、明るい気持ちになれた。」

いつも思う。

良いモンだよな。家族って、と。

6月5日 午前6時40分 天海慶次 自室

スマートフォン
携帯電話に設定されたデフォルトのアラーム。

強烈な目ざまし時計のベル。

ステレオスピーカーから吐き出される大音量のロック・ミュージック。

全てが同時に俺の耳と脳に襲い、蹂躪し、俺は目を覚ました。朝日が目に差し込み、思わず再び目を閉じる。

目もとが涙で薄っすらと濡れていた。何か悪い夢でも見たらしい。

「悪夢の方がまだマシだったんだけどな」

俺は今、悪夢より厄介な《現実》にいる。

殺人犯が近くにいる学校に行かなければならないという現実に。昨晚、10時を回った頃に我が家に学校からの電話が届いた。

内容は《学校で事故があったので気をつけて登校するように》との事。

「馬鹿馬鹿しい。何でこんな日に学校に行かなきゃならないんだよ。ダリい」

轟音が部屋を支配する中、ため息をつく。

が、何を言った所で現実が変わる訳でも無い。2度と留年は御免だ。

俺は起き上がろうと目を開いた。

まず目に入ってくるのは、天井にまるで封印の呪符のように貼られた《単語》の羅列。

B5の印刷用紙に記された《日本語》《ひらがな》《カタカナ》《漢字》《ことば》《天海慶二》《あまみけいじ》その他様々な手書きの文字。

単語それぞれに繋がりはなく、子供にでも分かる言葉ばかりだ。不気味な事この上ないが、別に俺の趣味ではない。必要だから貼ってあるのだ。

「全部。意味は分かる。今日は問題無し」

全てに目を通し、確認を終えてから起き上がる。

起き上がって最初に見える物は壁。いや、《壁に張られた紙に書かれた文字》。

《机の上のノートを見る》

天井の文字の次は机のノートに目を通すのが俺の日課。いや、義務だ。

この義務を果たさないと大変な事になる。なぜなら

「兄さん！寝坊しちゃだめですよ…って、あれ。起きてたんですか」

目覚ましを止め忘れていたせいで、俺を起こしに来たのだろうか。部屋のドアが乱暴に開けられた。アラームやベル、音楽はいまだに部屋中を叩き、殴っている。

ドアを開けたのは黒髪の少女。中学生くらいだろうか。小柄で、艶やかな黒髪と小動物のような仕草が特徴的な少女だった。

少女と、目が合う。

「もう。起きてたんなら目ざましを止めてください。ご飯ですよ？」

拗ねる様に、責める様に、だが親しげに声をかけてくれる少女。

だが、俺には。

「ど、どうしたんですか？そんなに見つめて」

俺には。

「なあ。アンタ」

俺には

「一体」

俺には……！

「誰、なんだ？」

少女の顔に　全く、そう。

全く、見覚えが無かったのだ。

第二話 俺と兄妹と脳障害(2)

「兄さん。《忘れ》ちゃったんですか！？美鳥です。妹の美鳥ですよ！」

少女の叫びが部屋に響く。

彼女の声は部屋に鳴り響く雑音を突き抜け俺の耳に、そして胸に突き刺さった。

嘆く様な、訴える様な、すぎる様な声。

だが、彼女の声が俺の記憶を呼び覚ます事はなかった。

彼女が誰なのか考える暇はない。どうせ考えた所で思い出せる事は無いのだ。

俺がやらなければならぬ事はただ一つ。

携帯電話の電源を落とし、目覚ましを止め、スピーカーから電源を引っこ抜く。そのままベッドから跳ね起き《机の上のノート》を開いた。

「天海美鳥。妹 妹っ！？」

そんな馬鹿な。俺の兄弟は兄だけのはずだ。

「…ノートを見て思い出さないと事は、《名前を忘れた》と言う訳ではないようですね」

俺の隣でノートを覗き込んでいた少女が言う。目に浮かぶ涙は今にも溢れ出しそうだった。

ノートには家族や友人の名前。忘れてはいけない《思い出》がびっしりと書かれている。

ノートの中身は俺の全て。絶対に《忘れ》てはいけない記憶。《忘れ》ても思い出さなければならぬ記憶だ。

「昨日は君の事を覚えてたんだよな？」

「はい。リビングで2時間近く一緒にいたと思います」
涙を袖で拭う少女。

見ていられなくなり、机の上に置いてあったティッシュの箱を渡してやる。

「…」

無反応。何故だろうか。俺が拭いてくれるとでも思っているのだろうか。

まさか。ありえない。十九にもなって妹の涙を拭き、鼻水をかませる兄なんて恥ずかしすぎだ。

差し出したまま硬直する俺を見て、少女は無言でティッシュを受け取った。

落ち着くのを待ち、尋ねる。

「昨日、俺と何を話したか教えてくれないか？」

「ええっと。昨日の帰りは遅かったです。警察に行ってきたと」

その事は覚えている。死体を発見したからだ。

そして、夜中に兄から自殺では無いと聞いた。

「死体の事なら覚えてる。その話を夜中に兄貴としたんだ」

「大兄^{ひろ}さんの事を覚えてるって事は《家族》の事を忘れたわけではなさそうですね」

父の事も、母の事もはつきりと覚えている。

「けど妹の事だけすっかり忘れてる、か」

また俺は、大切なものを《忘れ》てしまったのか。

「それですね。死体を見つけたって話を聞いた時、わたしはこう言っただけです。『自首してください』って」

「殺してないっ！」

酷い言い草。俺は彼女にどんな目で見られていたと言っただけだ。

「そのセリフも昨日聞きました。同じ事を何度も言うのは面倒なので早く思い出してください」

「俺の妹ってこんな毒舌なのかよ。思い出すのが怖い…」

頭を抱える俺。未だに思い出せない。他に何か手掛かりはないのだろうか。

「あっ」

「何かあったか？」

「兄さんから貰ったグラスを割っちゃったんですよ。大切にしていたのに…」

途端に、しゅんと沈む少女。感情の移り変わりが激しい。

「それも忘れちゃったんですね。デイズニールランドのお土産の

《ミッキーのグラス》なんですけど」

ミッキーの　　グラス？

その言葉を聞いた瞬間。

俺の頭に、疼きが走った。

頭蓋の中に虫が暴れまわる様な感覚。

何度も、何度も味わった感覚だ。

疼きは次第に大きくなり、痺れへと変わる。

痺れは痛みと変わり、痛みは《記憶》へと変化した。

ミッキーのグラス。ミッキーマウスのグラス。ディズニー。ディズニーランド。

山のように積まれていたパズルのピースが自動的に組み立てられていくかのように膨大な《記憶》が俺の頭の芯から溢れ出す。

「そう、だ。そうだった」

その《パズルのピース》の中に、確かに存在していた。

彼女が、目の前の少女がグラスを両手で握りしめるその姿が。

満面の笑顔を俺に向けるその姿が。

「そうだよ！ミッキーのグラスだ！5年くらい前に俺が買ってきた奴だよな。修学旅行で！」

頭が痛むのもお構いなしにうるたえる少女の手を握る。

まだ頭の中で大小様々な記憶が暴れまわっているが無視だ。

「はい…。思い出してくれたんですね？」

「ああ。ケンカして無茶苦茶冷たかった時も、ソレだけは大事にしてくれたんだよな」

「そ、そんな事まで思い出さなくていいんですっ」

顔を真っ赤にしてうつむく少女を見て俺が笑う。そうだ。このやり取りだ。これが俺達の日常だ。

記憶が纏まりを帯び、急速に頭痛の波が引いて行くのを感じる。

完全に収まるのを待ち、俺が口を開く。

「ああ、そうだ。わすれてた」

「えっ？」

少女の体が硬直し、身を震わせ、強張るのが見て取れる。

大丈夫。お前が想像しているような言葉じゃない。

「おはよう。《美鳥》」

箱からティッシュを取り出し、少女の目に溜まった涙を拭いてやる。

いや、《少女》では無い。彼女は俺の妹、《美鳥》。

「おはようございます。兄さん」

ようやく安心したのか緊張を解き、笑顔で返す美鳥。

こうして、俺の一日が始まるのだった。

少しだけ俺の事を話そうと思う。

長くなるが大事な事だ。聞いて欲しい。

1年ほど前、俺は交通事故にあつたらしい。

その事故は、ある人物を庇って起きたと聞いた。

庇ったとされる人物の名前は風間^{きい}祈衣

昨日、一緒に事件現場に居た女だ。

《らしい》、《かばったとされる》と言うのは、俺が事故の事を全く覚えていないから。

頭を打ったせいなのか、何なのか。今でもその日の事は思い出す事

が出来ない。

そして、その事故の日から俺はある障害に悩まされる事になる。

【高次脳機能障害】。

記憶障害と言い換えた方が分かりやすいか。

《事故や事件をきっかけに、それ以降の記憶をとどめる事が出来ない。》と言う事件や物語が知っているだろうか。

例えば、朝起きたら昨日までの記憶全てを忘れてしまう。

例えば、昼食にカレーを食べたとする。だが、数分後にはカレーを食べた事を忘れてしまう。

例えば、テレビドラマを見たとする。だが、見ている途中で物語の筋がさっぱり分からなくなってしまふ。それがどんな単純な物語でも、だ。

どんな喜びも、どんな発見も、どんな感動も、ほんのわずかな時間で忘れてしまふ。

患者の世界は事故の日で止まったまま。まさに悲劇だ。

そして、俺の記憶は、眠りに落ちるたびに失われる。

だけど、俺は少し違う。全ては忘れない。

俺が忘れるのは

一つの《ことば》と、そのことばに《関連した物事》を忘れる。

《ミッキーのグラス》と一緒に《グラスを大事にしていた妹》の事を忘れたように。

その日一日で目にしたもの、耳にしたものの中から一つの《ことば》と、そのことばに強く関連した《記憶》がごっそりと抜け落ちる。今まで経験から、《忘れたことば》に法則性は無い。

だが、救いはあった。

《忘れたことば》を文字で見たり、耳で聞いたりすれば思い出せるのだ。

問題は、《忘れたことば》が何なのかが、誰にもさっぱり分からない事。

人間が一日に目にし、耳にし、肌で感じる情報量がどれほど分かるだろうか？分かる訳がない。

ある日は《マヨネーズ》を忘れていた。誰も全く困らなかった。恐らく《忘れた》事さえ何日も気付いていなかったと思う。

関連して思い出した事と言えばマヨネーズ副長と土方スペシャルとポテトサラダをはじめとするいくつかの料理くらいなものだ。

だが、ある日は

《友達》を忘れた。

関連して、学校の事、趣味の事も全て抜け落ちてしまった。幼児になってしまったと言ってもいい。

その恐怖は今でもはつきりと覚えている。

俺は毎日毎日、何を《忘れる》かに脅えて床につく。

明日は俺が俺じゃないかもしれない。

誰も《忘れたことば》を見つげ出せないかもしれない。永久に《忘れた》ままなのかもしれない。

それどころか、障害が悪化し、《忘れたことば》を聞いても思い出せなくなるかもしれない…！

お前らにこの恐怖が分かるか！？

…こんな生活が、もう8カ月以上続いていた。

- - - - -

「兄さん？」

美鳥の声で我に返る。

「震えて…いるんですか？」

彼女の言う通り、俺は震えていた。

うずくまり、卵のように丸まり、がたがたと震えていた。

足が、腕が、肩が、体が、頭が、全身が、《忘れた》事への悔しさ、情けなさ、恐怖で震えていた。

また、家族の事を忘れてしまった。

また、大切なものを失う所だった。

「別に、大丈夫だ。すぐ収まる」

強がり。当然だ。これ以上妹に、家族に心配や迷惑を与えるわけにはいかない。

この《障害》のせいでどれだけの苦勞をさせてきたと思っているんだ。

美鳥の事を忘れたのも一度や二度では無い。

それでも、彼女は不平不満も言わずに接してくれる。

心の中では、《忘れ》られたことに大きなショックを受けているだろうに。

だから、俺には強がることしか出来ない。

兄に、妹に、両親に、風間に、平気な顔を見せ続けることしか出来ない。

それでも時々、本当に時々なのだが、このように不安定になってしまつ。

「強がらないで下さい。家族なんですから」

美鳥が、俺の頭の上に手を置くのを感じる。

ほんのりと温かく、そして涙で少しだけ湿っていた。

「馬鹿。放せつて」

「イヤです」

空いている方の手が俺の背中に回り、きつく抱きしめられる。

何故か、抵抗を許さない魔力があつた。

「家族なんですから。頼ってください。信じてください。私も、大兄さんも、お父さんもお母さんも、それに祈衣姉さんも。みんな兄さんの味方なんですから」

俺の頭を撫でながら、言つ。

照れ恥ずかしくもあり、くすぐったくもあつたが不思議と悪い気はしない。

美鳥は、俺の震えが収まるまでずっと俺の体を離さなかった。

第二話 俺と兄妹と脳障害(3)

「なあ。美鳥」

「どうしました？」

体の震えは止まった。もう、大丈夫だ。

俺は抱きしめられていた体をそっと離れた。

「ありがとな」

「はい！」

嬉しそうに頷く美鳥。しかし俺には気になる事があった。

「ところで、聞きたいんだけど」

「何がですか？」

睫毛の長い大きな瞳をじっと見つめ、問う。

「いきなり爆発したりしないよな？」

「しませんよ！？どこの世界の話ですか！現実世界では妹もリア充も爆発しませんからね！」

「冗談だよ。そんなに怒らなつて。ところで兄貴は？」

兄には聞いておきたい事があった。

もちろん《深夜以降、何か進展があったか》だ。

「大兄さんなら、さつき帰ってきて今は寝てますよ。どうかしたんですか？」

「いや、何でも無い」

寝ていると言うことは恐らく大きな発見はなかったと言うことだろう。徹夜明けの彼を起こすのも忍びない。

それに、深夜の早朝で警察の捜査に進展があるとも思えない。思考を一旦兄から外すことにする。

「そうだ。風間に電話しなきゃいけないんだっ」

「祈衣姉さんにですか？」

「夜中にされた兄貴の話を、な」

風間にも伝えなければならぬ。

昨日の死体が自殺では無い事を。

そして警告しなければならぬ。

探偵風を吹かせて事件に首を突っ込まないようにしろ、と。

なにしろ相手は殺人犯。

そうでなくとも事故死体を自殺に偽装した死体遺棄犯だ。

どちらにせよ、イカれている。普通の高校生が好奇心で首を突っ込んで良いようなことではない。

「大兄さんがどうしたんです？」

どうやら美鳥は兄から何も聞いていないようだ。小首をかしげて俺に問う。

「ああ。昨日の死体、どうやら自殺じゃ無いらし」

「やっぱり犯人は兄さんですね。第一発見者が一番怪しいって言いますし……」

何で真顔なんだよ。

「殺つてねえよっ！どうしてお前は俺を殺人犯に仕立て上げるんだっ。探偵気取りか！」

「探偵に憧れるのは女の子として自然なことですよ。これは常識です」

自称・高校生探偵の顔が美鳥の後ろに見えた気がした。そもそもどこの世界の常識だ。

「どうやら俺の身の回りに妹の教育上宜しくないヤツがいるらしい

な。一度本気で滅ぼさなきゃならんよつだ」

「滅ぼさなきゃ……って、何マンガですか。仲良くしてくださいよ」

美鳥の言葉は華麗にスルー。携帯電話スマートフォンを取り出し、風間へ発信。

2回。

3回。

4回。

5回目のコール音が鳴り終えた時。

『はい』

ようやく風間の声が聞こえた。

「ああ、俺だ」

だが。

『お電話ありがとうございます。風間探偵事務所です。ただいま、営業時間外ですので、おかけ直しただくか、発信音の後にお名前と御用件をお願いいたします』

返ってきたのは意味不明な留守番電話のメッセージ。

「あ・の・馬・鹿アアアアアアア!!!!」
ぴー。

無機質な発信音が続けて聞こえる。

自然と携帯電話を握る手に力が入る。みしみしと悲鳴を上げているがきつと気のせいだ。俺は冷静だ。

「高校生の携帯電話に探偵事務所も営業時間外もあるかつ！この、エセなりきり探偵ツ！いいか、オレだ！気付いたらすぐに連絡よこせツ！分かったな？」

「落ち着いてください兄さん！留守電にツツコミを入れても無駄ですから！」

「いいや。俺は冷静だ。きっと冷静だ。多分冷静だ。冷静になりた
い。」

「まったく…あの馬鹿。朝から疲れさせやがって」

「まあまあ。いつものことですし。それにいつも3人で登校してるんですから 電話しなくてもすぐに会えますよ」

確かにその通り、なのだが。

「それとも、心配ですか？」

「一応、幼馴染らしいしな」

「《一応》、つて…」

美鳥が頭を掻きながら困った顔をした。

気まずい沈黙が部屋を支配する。

「あ。朝ごはんの事を忘れてました！」

妙な雰囲気吹き飛ばそうと、美鳥が話題を変える。

「そうだ。早く行かなければ風間と合流できない。」

「今日の朝飯は何なんだ？」

「食事は俺と美鳥で日替わりで作っている。母親が休みの時などは作る事もあるが、基本的に家事は俺達二人の仕事だ。」

「そうですね。今日は2つから選べるんです」

「選べる？和食か洋食かと言うことだろうか。」

「何から選べるんだ？」

「《健康に悪いの》と、《命にかかわるの》です」

せめて選択肢は食物にしるよ。

「何でそんな選択肢しか無いんだ!？」

「大事な妹を目覚まし代わりに使ったからです」

「どうして目覚まし代わりに使うとそうなるんだ!？」

「…スープとパンが火にかけっぱなしだからです」

俺のせいだよ畜生。

「健康に悪い方で」

冷たい現実を前に、俺は健康に悪い方 パックご飯とインスタ

ント味噌汁 を選択することにした。

ちなみに命が危うい方は炭になったパンと黒濁食のスープだったらしい。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

6月5日 午前7時40分 通学路

「おかしい」

「そう…ですね」

いつもならこの時間、この場所に風間は立っているはずだった。

自慢じゃないが《忘れ》たこと以外に関しての記憶力には自信がある。記憶違いと言うことはあり得ない。

「俺はもう少し待ってみるけど、お前はどうする?」

「うーん。私は委員会の雑用があるので先に行かせてもらいますね」

「オーケー。じゃあ、また家でな。気をつけるんだぞ。何かがあるか

分からないしな」

「心配し過ぎてすよ」

頬を膨らます美鳥だったが、気が気では無い。

学校に殺人犯がいるかもしれないのだ。家族でなくても心配するに決まっている。

本当なら休ませてやりたいところだったが、皆勤賞が懸かっているとかで断固として拒否された。

「とにかく、学校では1人になるな。俺には何も出来ないんだからな」

「大丈夫ですよ」

心配する俺をよそに美鳥は脹れ面から笑顔になる。

「いつもはチンピラもどきなのにヘタレな兄さんですけど、私がピョンチの時は絶対に助けてくれますから」

お前は俺をけなしたいのか、それとも持ち上げたいのか。どっちなんだ。

俺の心を読んだと言うのだろうか、美鳥が答える。

「どっちも、ですよ。ふふっ」

俺が言い返す間もなく、駆け足で駅の方へ向かっていく。

「……ったく。生意気な妹だ」

呟きながら携帯電話を取り出し風間に発信。再び《あの》留守番電話につながる。

「とりあえず30分だけ待ってみるか」

どうせ学校に行く気はしない。時間ならたっぷりある。

.....

六月五日 午前九時十二分。私立平坂高校校門前

時間ならたつぷりある。そう思っていた。だが、1時間待っても俺と風間が出会うことはなかった。もちろん電話も、そしてメールもつながらる事が無く、だ。不安になり、自宅も訪ねてみた。だが無反応。誰もいない。

「まさか、変な事に巻き込まれてるんじゃないやねえだろうな」
頭痛のタネがまた一つ増える予感。

仕方なく、俺は小さな希望を胸に学校へ向かうことにした。風間が早めに登校している可能性に賭けて。

電車に揺られている時間も風間にメールを送る。

もしかしたらただ携帯電話を家に忘れていただけかもしれない。俺の取り越し苦労かもしれない。

しかし、彼女の普段の行いを見ると、好奇心から何かとんでもない事に巻き込まれている気もするのだ。

電車を降り、走る。

駅から学校まで徒歩で10分。走れば5分とかからない。

きつと、教室のドアを開ければ普段と同じように「あれ、ケージ。どうしたの?」と、とぼけた面を見せてくれるはずだ。

そう信じ、走る。そう願い、走る。やがて、校門が見えてくる。校門をくぐり抜け、そのまま全速力で走りぬけようとした瞬間、

「待っていたよ」

背後から呼びとめられ、慌ててブレーキをかける。

俺の背後に立っていたのは、少女。それも、息を呑むほどに美し

い少女だった。

制服の色から察するに、美鳥と同じ1年生。

身長は美鳥よりは高いが、それでも小柄。

驚くほど色白で、瞳もブラウンがかっている。恐らく生まれつき色素が薄いのだろう。

眼鏡の下の瞳は、どこか眠たそうにこちらを見ていた。

太陽の光を浴びた髪の毛は黒髪であるはずなのに銀髪に錯覚してしまうほど細く、まるで職人が手掛けたフランス人形のようなだった。

「本人からの伝言さ。彼女は、風間祈衣は来ない。今日はね」

背中まで伸びた三つ編みのお下げを揺らし、宣言する。

「お前は、誰だ？」

見覚えのない生徒に向かい、問う。

膨れ上がる不安。やはり風間は事件に巻き込まれたのだろうか。

「：僕の事を忘れたのかい？」

ほんの一瞬、顔がこわばる。

俺はこの少女の事を知っているのだろうか。

また、《忘れ》てしまったのだろうか。

「君が知らなくても、僕は君の事をよく知っている　天海、慶次君」

どうしていいのかわからず硬直する俺。

そんな少女が眠たそうな瞳のまま悪戯っぽく笑う。

音楽室の死体、行方不明の幼馴染、そして見知らぬ《俺をよく知る少女》。

予想外の事が多すぎ、俺の思考はオーバーヒートを起こしそうだった。

だが、何よりも予想外だったのは少女が次に放った言葉。

「僕は、君の《恋人》だよ」

「!？」

頭が、どうにか なってしまいそうだった。

第二話 俺と兄妹と記憶障害 終

第二話 俺と兄妹と脳障害(3) (後書き)

次回予告

明かされた慶次の記憶障害

前触れなく表れた謎の電波入った少女。

学校に現れない彼の幼馴染。

眼鏡少女の正体は彼の忘れた記憶の中にあつた。

(色んな意味で)非常に残念な結果と共に謎は解決する!

次回、第三話【オレと眼鏡とロクデナシな交友関係】に続く!

第三話 俺と眼鏡とロクデナシな交友関係

六月五日 10時15分

私立平坂高校。3 - A 教室

教室に辿りついたのが10時ジャスト。

「無断遅刻とはどういうことなの？」

何故かひたすらにクラスメイトの前で説教されてしまった。非常に居心地が悪い。

「そんなに怒られるような事したか？」と席でぼやいたら、クラスメイトに「当たり前だよ」と苦笑された。

理不尽だ。理不尽にも程がある。

砂粒のような可能性に賭け教室に向いてはみたが、やはり風間はいなかった。

すぐにでも学校から飛び出したかったが、あいにく俺は学生。教室に入ったが最後、授業が終わるまで逃げることはできそうになかった。

しかし、一体何だというのだ。

校門で出会った人形のような少女。

誰だ、あの女は。俺は知らない。見た事も聞いたこともない。

一人称が《僕》で、《校門で待ち構え》、終いには《恋人》、だ。現実にはマンガとは違うのだ。謎の少女なんて存在する訳が無い。もしいたとしたらそれは恐らくマンガやゲームに影響されたただの中二病患者だ。

せめて名前くらいは聞いておくべきだった。

俺が質問する前に煙のように消えたことを思い、後悔する。

事故が原因の入院でオレは留年し、今のクラスに親しい奴はほとんどいない。

無駄に真面目な妹は学校で携帯を使わない。メールは送ったが、どんなに返事が早くても昼休みになるはずだ。

もちろん風間からの連絡も来ていない。

手がかりは、ほぼ無し。途方に暮れてしまう。

とにかく、2限が終わったら美鳥のクラスに行ってみるしかないかった。

眼鏡女が着ていた制服は1年のもの。美鳥なら何か知っているかもしれない。

「ねえ。ちょっと?」

「…え?」

思案を続けていると担任の朝倉から声をかけられる。

「授業、聞いてる?天海君?」

「いや、あんまり。すいません」

語尾を半音上げる特徴的な喋り方が、今日に限って妙に耳に障る。こっちは授業どころでは無いのだ。言った所で理解してもらえないとは思えないが。

「授業終わったら職員室来てね?」

それはマズい。今は少しでも早く美鳥と会いたいのだ。

呼び出しで足止めを食らう訳には行かなかった。

いし、ちょうどいいみたいなの？」

「ちょうど、いい？」

「…それって、まさか」

誰もいない保健室に若い女教師と生徒二人きり。

「まさかの…サービスシーンですか？」

「期待してる？」

「それは、ちょっと」

即答する俺。

「あら？どうして？」

「先生…若くないし…ブベラッ！！！」

言つが早いか顔面に拳が叩きこまれてしまった。

「何か言った？」

「生徒に幕ノ内一歩ばりの右コブシを叩きこむんじゃねえっ！死ぬかと思つたわ！」

抗議の声を上げるが、担任は素知らぬ顔。

「何言ってるの？幕ノ内じゃないわ？ギャラクティカ・マグナムよ？」

「だから例えが古いんだよ！！何十年前の　　うぎゃあああああ
あああああ」

せめて最後までツッコませてくれ。

ツッコミの途中にアイアンクローは本当に勘弁してほしい。
プロレスラーに握りつぶされるリンゴの気持ちがあつた気がする。

「それに、私はこう見えても年より若く見えるって全世界から評判なんだからね？」

「若く見えすぎるんだよ！オレが一年の時から既に居るにも関わらず生徒で通る若々しさっておかしいだろ！？アンタは吸血鬼か何かっ！」

「イグザクトリィ？（その通りです）」

「やかましい！この妖怪変化！教師が高校の制服着て授業するな！」

《制服をひらひらさせながら》Vサインを出す担任に向って怒鳴る。
不老不死の妖怪、朝倉なつみ。これもまた平坂高校七不思議の二つ目。

ちなみに三つ目は《何故かクビにならないコスプレ教師》だ。

「天海君…？」

「何ですか」

突然、担任の声のトーンが変わった。

凍りつくように冷たく、刃物のように鋭利な声。

俺は不用意な発言をまたしてしまったのだろうか。

それとも、まさか。

俺の脳裏を《最悪の想像》がよぎる。

どうして担任は職員室ではなく《人気のない保険室》に俺を連れ込んだのか。

昨日の死体の姿を思い出す。被害者はすぐ隣のクラスの生徒。

今朝から風間の姿を見ていない事を思い出す。アイツは俺と同じクラスの生徒。

そして、目の前にいる女は俺のクラスの担任。

まさか 。 もしかして 。

狼狽する俺を鋭い瞳で見つめながら担任が口を開いた。

「人のファッションにケチをつけるのは礼儀として良くないと思うわよ?」

「そっちかよ!? アンタは礼儀の前に常識を学ベツツ!」

「冗談はさておき?」

顔を殴った事は冗談で済まさないで欲しい。

「昨日の話の続きを聞きたいんだけど?」

なるほど。 そう言うことか。

少なくとも例の死体が自殺で無い以上、学校としても調査が必要。 今後の為に俺や風間から話を聞いておきたいのだろう。

あいにく、風間は行方不明だが。

「別に構いませんけど、警察に話した事が全部ですよ。 見た事、覚えてる事は全部話しました」

担任だって知っているはずだ。 何せ警察署での事情聴取の際に俺達に付き添っていたのは彼女。

傍若無人だが、実は生徒思いの所もあるのだ。

「そうなんだけどね？」

少し、困ったような顔をする担任。

「学校側としても『なにかしましたよー』っていうポーズが必要でさ。メンドくさいよね？」

教師とは思えない発言。彼女らしいと言えば彼女らしいのだが。

「年増も大変ですね。協力したいのは山々なんですけど、俺用事があつて」

「用事？」

俺の頬を全力でつねりながら担任が聞く。手を離してほしい。もげる。さもなくば干切れる。

「休み時間中に妹の所に行きたいんですよ。ちょっと聞きたい事があるんで」

「そつか。じゃあ引き留めるわけにもいかないね？でも…」

きーんこーんかーんこーん

授業開始のチャイムが無情にも鳴り響いた。

「授業、始まつちやつたよ？」

「…マジか。マジだ。畜生」

「まあまあ。3限目はサボっていいから？」

「サボ…つて。教師が言つていいんですか…。ああ、そうだった。先生にも聞きたい事があるんだつた」

彼女は担任。もしかしたら風間の事を何か知っているかもしれない。いい。

休みの連絡や、行方不明の連絡が来ている事も考えられる。

「風間祈衣から休みの連絡つて来てます？」

十中八九、何の連絡も来ていないだろう。だが、それでも尋ねずにはいられなかった。

だが、担任の放った言葉は俺の予想を大きく裏切るもの。
「本人から休むって電話があつたけど、それがどうかした？」

《あつた》だと？今、確かに聞いた。《本人から連絡があつた》と。

「用事があるから休むって。昨日の事がショックだったろうし、OK出しちゃったけど？」

「それ、本当ですか!？」

衝動的に立ち上がり、担任の肩を掴む。

「え。何かマズかったの？」

掴みかかった俺に蹴りを入れながら担任が驚く。

「いや、連絡が、取れなかつたんで」

げぼげぼとせき込みながら俺。何故蹴った。

「連絡つて。二度寝でもしてるんじゃない？マイペースな子だし？」

「マ、マイペースって。アンタが言うか…」

「褒められちゃった？」

「褒めてねえよ。後、そうだ。もう一つ」

腐つても彼女はこの学校の教師だ。眼鏡女の事を何か知っているかもしれない。

「一年にお下げを二つ垂らした眼鏡のボクっ娘がいると思うんですけど、知りませんか？」

「っ…」

この反応。当たりか？

「何か知ってるんですか？」

「知ってるも何も」

一瞬の間。

「そんな生物、二次元にしかいるわけじゃない。現実に居たら爆笑モノ？」

今日のお前が言うなコーナーはここですか？コスプレ教師さん。

「実際に見たんだから仕方ないだろう！俺を可哀想な人を見る目で見るとなっ！」

「天海君……。先生はマンガやゲームを排除するべきとは思わないけど、それでも読み過ぎは良くないと思うの？」

「やかましいわっ！……って、本当に知らないんですね」

色好い答えが来るとは期待していなかったが、案の定だった。

何しろ、俺が通う平坂高校はこの少子化の時代に生徒数3000人を超えるのだ。

担任が眼鏡女の顔を知らないのも無理はないだろう。

「なんだったら、1年の先生に聞いてみるけど？」

思わぬ提案。渡りに船。

「じゃあ、お願いします」

「おっけー。じゃあ、帰りのSHRまでには調べておくから先生は寝るね？」

言っが早いか、備え付けのベッドに飛び込む担任。既に寝息が聞こえている。

もしかしてこの女、聞き取り調査にかこつけて自分がサボりたかっただけじゃないのか？

「不良教師め……」

だが、これで自由になった。

サボりの許可も頂いたことだし、次の休み時間まで好きにさせてもらうことにする。

状況の整理の他にも調べたい事もある。

「この時間なら、そうだな」

《あそこ》なら相談相手もいる。

調べたい事もある。

そして疑問の答えもあるかもしれない。

考え事のできる空間に場所を移す為、俺は保健室を後にした。

第三話 俺と眼鏡とロクデナシな交友関係(2)

十二時十分

私立平坂高校 図書室

「《風間が自分から学校に連絡を入れた》って、どう思います?」
「考えられるのは二つだ」

俺の問いに顔見知りの図書室司書、優紀爽馬ゆきすまは重々しい声で答えた。

ちなみに、優紀爽馬なんて名前をしているが、彼の見た目はゴリラである。

180センチを越える長身、色黒で筋骨隆々、頭を坊主に刈りこみ真っ黒に日焼けした四十路前の、ゴリラである。

サボリの許可を担任から貰った事を述べ、俺はゴリラに相談していた。

3度の飯より文字を読むのが好きで、膨大な知識と、蓄えた知識を使いこなす頭脳を持つ彼は非常に頼りになるのだ。

ただし見た目はゴリラだが。
何故ゴリラが司書なのか。平坂高校七不思議のひとつに加えても良いと思う。

「朝倉先生に風間さんが連絡したって言うなら2つの事が予測できる」

「2つの事?」

「そつだ。まず一つ目。自分の意思で学校を休んだ」
「マッキー黒(極太)のような指を立てるゴリラ。」

「そしてもう一つ。誰かに強要されて電話を入れた」

「強…要…」

それは、風間が何らかのトラブルに巻き込まれていることを意味している。

俺の不安そうな表情を読み取ったのだろうか。ゴリラがにやりと笑い、続ける。

「Bと言うことはないだろう。心配は要らん。一緒に死体を発見した天海君が無事で、風間さんだけ何かがあるってのはおかしいだろう?」

「確かに、そうなんですけど…」

ただ、どうしてもオレに連絡が無いか。それだけが気になった。

二度寝しているだけかもしれないし、本当に用事とやらで忙しいのかもしれない。

だが、これ以上誰かに何かを聞くこうにも、授業中では何もできない。

とりあえず風間や眼鏡女の事は置いておく。

3限が終われば昼休み。昼休みになれば美鳥に話が聞ける。

「あと、メガネの子の話だが、俺は知らんな。少なくとも図書室で見た事はない」

「そう、ですか。なら、やっぱり美鳥に話を聞いてみるしかないか」

「そこまで気に病むことも無いだろう? 風間さんの突飛な行動はいつものことじゃないか」

もし、美鳥が何も知らなかったとしても放課後、担任に話を聞けばいい。

ゴリラの言う通り、ここで気を揉んでも仕方が無かった。

なので、俺は被害者の梶原について調べる事にする。

「じゃあ、被害者の梶原の事について教えてください」

引っかかるのは、俺が彼の名前を覚えていない事。

昼休みに彼の事を話したと風間は言うが覚えていない。恐らく昼寝をしてしまったからだろう。

「梶原君について、とはまた…随分漠然としているな」

何も覚えていないのだから仕方が無い。

昨日の球技大会、自分のクラスの試合が全て終わり暇を持て余した俺はここ、図書室で涼んでいた。

外は30度を超える猛暑だったがエアコンの効いた図書室は居心地がよく、うたた寝をしてしまったのだ。

ゴリラに叩き起こされるまでの5分程度の睡眠だったが、俺が《ことば》を《忘れ》るには十分。

思い出す事が出来れば事件解決の糸口につながるかもしれない。

「特になかったら、昨日彼が殺されたニュースとかの事でもいいんで」

朝の《出来事》のせいで、俺はニュースや新聞を見る事は出来なかった。

「何でもかんでも聞くのは悪い癖だぞ。そこに新聞がある。自分で調べなさい」

ゴリラがカウンター前の新聞棚を指差す。

仕方なく、一番手前にあった地方紙を手に取り、開く。

今日の地方紙の朝刊によると、《六月四日、午後三時三十分ごろ、私立平坂高校内で男子生徒の遺体が発見。警察は事件と自殺の両方の面で捜査をしている》とのこと。

「その程度か。まあ、当たり前だけどな」

記事の内容に少々の苛立ちを感じながら閉じ、元の場所へ戻す。

「何か参考になったか？」

「いいや、全然。梶原ってどんなヤツだったんですか？」

俺が知っている事と言えば、彼がA組と言うこと。それだけだ。

「優秀な子だったよ。よく図書室で英字新聞や英語の本を読んでいた」

「英語？」

「ああ、そうさ。知らないか？彼は死ぬ直前に英語の弁論コンクールで賞を取っていたんだ」

初耳だった。

スマートフォン
携帯電話を取り出し、検索サイトを開く。

入力する文字は《梶原正明》《平坂高校》。

検索結果を見て、感嘆する。

「さすが特進クラスのA組。全国最優秀かよ」

そう、梶原は英語の弁論コンクールで全国最優秀賞と言う成績を収めていた。

ニュースサイトの記事によれば更新日は6月2日。一昨日だ。

ニュースの本文をコピーし、フリーメモに貼りつける。何かの役に立つかもしれない。

「おお。さすが若者。オッサンには真似できない事をするねえ」

そもそもあんたはオッサンではなくゴリラだろう。口に出したら殺されるので言わないが。

「って事は風間と話したのはコンクールか」

接点のない同級生の話題が出るなんて、それ以外考えられなかった。

「はあ……」

深い、深いため息。

色々と情報を集めてはみたが分かった事が一つだけある。

「結局、何も分かって無いって事か……」

イラつく頭を押さえながら俺はカウンターに突っ伏した。

「どうしたどうした。若者がそんなため息をついて」

ゴリラがぐりぐりと俺の頭を撫でつける。止めてくれ。顔が押しつぶされる。ゴリラの握力は400キロを超えるんだぞ。

「だって、イラつくんですよ。この記事」

「イラつくって？」

「人が死んでるのに、地方欄の隅っこに数行ですよ」

「まあ、事件が事故か自殺かも分からないんだから仕方ないだろう」

違う。そうじゃない。

ゴリラの言葉に俺は顔を上げ、きつ、と睨みつけた。

「例えば、これが自殺を苦しめた遺書付きの自殺だったとしたら？
遺書にいじめの犯人の名前が書かれたとしたら？」

「まあ、大きく取り上げられるだろうな」

困った顔をし、頭を掻きながら答えるゴリラ。

「それどころかテレビだってでっかく報道するだろうさ。だけど最初だけだ。すぐに収まる」

そう、1年前の事件のように。

「テレビや新聞は面白そうな、大衆が食いつきそうな話題しか大きく扱わない。マスコミだけじゃない。誰だってそうだ。人が死んでも、それが自分の学校の生徒だとしても平気で日常を送りやがる」

去年の夏休み、平坂高校の生徒が自殺をした。
女生徒は自宅で首を吊っているのを発見されニュースにもなり、
夏休み明けの学校は騒然となった。

しばらくはテレビでも大きく報道されたが、学校側の【調査の結果、イジメ等の事実はなかった】の一言以降、彼女の名前を見ることはなくなった。

「…」

ゴリラは口を開かずじっと俺を見つめていた。

「気づけばその子の事を話すのはタブーになって、事件の事もその内、忘れられちゃった」

「お前、宮元さんと知り合いだったのか？」

「違う、そうじゃない」

自殺した彼女と知り合いだったとか、イジメがあったかどうかなんて問題ではないんだ。

「ただ、騒ぐだけ騒いで飽きたら忘れる。そんな浮ついた事が、オレは許せないんだよ」

どん、とカウンターを叩く。

「分かんねえかなあつ！俺は、大切な人が死んだ事も《忘れ》ちまうかもしれないんだぜ？」

人は、誰かに忘れられて生きていけるほど強くはない。

例えどんなに仲が良かったとしても、俺が友人との思い出を《忘れ》てしまえば

ソイツらだって俺のもとから離れていく。

怖かった。失うことが。

恐ろしかった。俺が忘れ、俺の事を忘れられることが。

「許せねえんだ。誰かが死んだとか、誰かとの思い出とかを軽く見るようなヤツらがよ」

だからこそ、浮ついた噂に簡単に振りまわされるような風潮は大嫌いだった。

「天海君……」

「……ごめん。優紀さんに言っても仕方ないよな。ちよっと頭冷やす頭を振り、カウンターから離れる。」

「オッサンからアツい若者に一つだけ言えるのは」
背を向けた俺にゴリラが言葉を投げかける。

「君が《忘れ》ても、君が今信じている友達^{たち}は君の事を忘れない。世間なんてどうでもいいじゃないか。君には妹さんもいるし、風間さんだっている」

ゴリラの いや、優紀さんの言葉が胸に突き刺さる。

「彼女たちが君の事を見捨ててると思うか？」

美鳥の顔が浮かぶ。

妹は俺が不安定になっていた時、そばにいてくれた。

風間の顔が浮かぶ。

あいつは自分が汚れ役になるのも構わず、死体を見た俺の恐怖を取り除いてくれた。

「だけど、絶対とは言えないじゃないですか」

「素直じゃないねえ」

優紀さんの声には苦笑の色が混じっていた。

「《忘れ》てもいいんだ。ただ、《忘れ》る前に目いっぱい思い

出を作っておけば。その思い出が君たちの《絆》になる。絆があればどうってことはない。新しい思い出をまた作っていけばいいだけだ」

美鳥の事を、兄の事を、風間の事を想う。

何度も彼女らとの思い出を《忘れ》てきたが、アイツらは決して俺を見捨てなかった。新しい思い出を作ろうとしてくれた。

もし明日、アイツらの事をきれいさっぱり忘れていたとしても、今日までと同じように接してくれるだろう。

「彼女たちは君を信じてくれてる。きつと行動で示してくれる。だから君はそれ以上の信頼を行動で示してやればいい」

信頼、絆。恥ずかしい事を言う大人だ。だが、不思議と悪い気はしなかった。

「それに、君は捻くれ者だから言葉より行動で表した方がいいと思うしな」

余計な御世話だ。

「ああ。既に行動で示してるのか。だって、風間さんの事を一生懸命に探してるもんさ。オッサンの戯言だったよ」

うるさい。放っておいてくれ。

「いつも『風間に迷惑をかけられてる!!』なんて愚痴に来てるが、やっぱり大切に思ってるんだね!。それに、《同級生の死をニユース扱いなんて許せない!》なんて友達思いの証拠だしなあ。青春だねえ」

「ええいつ!それ以上言うな!別に心配とかじゃねえよつ!腐れ縁だから仕方なく...」

耐えれなくなり、振りかえって叫ぶ。

「それでいいんだ」

目に飛び込んできたのは優紀さん いや、ゴリラの笑顔。笑顔と言っにはあまりにもバケモノじみた顔だったが、確かに笑顔だった。

「君はそれでいい。口では何と言っても友達を大事に出来る子だからな。だから彼女たちは君の事を裏切らない。大丈夫だ」

「う、うるせえよ！よくそんなセリフを恥ずかしげもなく吐けるな。ゴリラの癖に！」

うんうん、としたり顔で頷くゴリラに捨て台詞を浴びせ逃げる。

「って、誰がゴリラだコラアツ！」

背後からゴリラの怒声が聞こえてくるが無視。

時刻は12時30分。ちょうど3限目終了のチャイムが鳴った所だった。

ちょうどいい。このまま美鳥の教室に行こう。

どこかから「廊下を走るなー！」と言っ声が聞こえた気がしたが、気にせず俺は妹の元へむかうのであった。

まさか、そこで朝の眼鏡女と再会するとも思わずに。

第三話 俺と眼鏡とロクデナシな交友関係(2) (後書き)

付け加えると平坂高校の授業は1コマ80分。

3限終了後に昼休みとなっています。

第三話 俺と眼鏡とロクデナシな交友関係(3)

「おーっす」

1-Dと書かれたプレートを確認し、引き戸を開ける。

「ほへ？どとどとうしたんですかっ？」

美鳥が俺に気付き素っ頓狂な声を上げる。

妹は教室の端で友人らしき女生徒と昼食を摂っていた。どうでもいいが米粒が付いているぞ。

「おおー。もしかして、みーみーのカレシ？」

「違いますよ。兄さんです」

クラスメイトらしき少女が美鳥に問いかけるのが聞こえた。

二人は俺の事を忘れたかのように話を続ける。

「えっ、みーみーってあんなにカッコいいお兄さんがいるの！？ちよつと紹介してよ」

「顔が良くても性格が悪いからプラスマイナスで0ですよ。きつと後悔します」

誰が性格悪い、だ。遠くにいると思つて好き勝手なことを言う。

「おい、聞こえてるぞ。誰が性格悪いんだ？」

「言つてません。気のせいですよ。それで、どうしたんですか？」

昼食を中断し、ぴよこぴよここと駆け寄りながら尋ねる。

「ああ。朝にちよつと変な事があつて」

俺や風間の事を知っている素振りの少女と出会つた事を話す。

「祈衣姉さんの事を知ってる1年生、ですか。どんな子でした？」

「眼鏡で、お下げで、僕っ娘で、色素薄そうだけどキャラが濃そう。な奴だけど、知らないか？」

我ながら意味不明な事を言っているとは思つ。
まあ、図書室にゴリラがいるのだ。僕っ娘がいてもおかしくはない、多分。

「つて、おい。どうした？いきなり黙つて」

「…兄さん」

何故か、目が据わっていた。

「兄さんは、その子の事を知っています」

「え？」

美鳥の声と体は震えていた。

嘘や冗談を言っている目では無かった。

まさかとは思っていたが、本当に《忘れ》ているらしい。

「彼女の名前は《黒川^{くろかわ}絢^{あや}葉》。

黒川：絢葉。初耳だった。名前を頭に刻み込む。

どのような関係だったのだろうか。まさか、本当に《恋人》だったとでも？

思案する俺をよそに美鳥が言葉を続けた。

「一言で言えば変人です」

「お前も十分変人だと思つぞ。ですます口調の女子高生」

「何か言いました？」

「言つてません」

コンパスを振り被るのを見て謝罪する。妹よ、それは武器では無い。文房具だ。

「彼女は学年内でも有名な変人ですから…。あまり話した事のない私でも知っています」

「なるほど、な。で、どんなヤツなんだ？彼女は俺の事を《恋人》
つて言つてたけど」

「恋……人？」

ぴたり、と美鳥の動きが止まる。
続けて、ゆっくりと、ゆっくりと首を上げる。まるで、壊れた口
ポットのようだった。

しばらく電池が切れたかのように俺の目を見つめたまま停止して
いたが、突然。

「違いますっ！彼女は、黒川絢葉は兄さんの恋人なんかじゃありま
せんっ！」

制服の襟を掴み、叫ぶ。

美鳥がここまで怒りをあらわにするのは珍しい。そして周囲の下
級生の視線が痛い。

一体、眼鏡女　黒川絢葉　は俺に何をしたのだろうか。

コンパスの針が今にも俺の首を貫こうとした時、ようやく冷静に
なり美鳥が俺の制服から手を離す。

「彼女は兄さんと同じ音楽部員です。昨日も『部員が3人しかしな
くてヤバイ』ってぼやいてましたから」

まさか。そんな訳が無い。部活は今年の四月からずっと俺と風間
の二人きりだった。

そう思いたかった。だが……

「また……《忘れ》たのか」

昨夜の事を思い返す。

俺は、深夜に一度目を覚ました。そして兄と話し、もう一度寝た。
つまり、《忘れたことば》が2つあると言う事だ。

一つは《ミッキーのグラス》。巻き込まれて美鳥の事。
そして、もう一つは《黒川絢葉に關係する何か》。

美鳥が言うには眼鏡女はオレの恋人では無いらしい。
では、どうして彼女は嘘をついたのか。

「簡単ですよ」

俺の疑問に美鳥が答える。

「彼女は変態で、中二病で、ストーカーだからですっ」

コンパスを握る手をわなわなと震わせ、吠える。

「落ち着け！まずは一つずつ説明してくれ。彼女は《俺と同じ部活》なんだな？」

ストーカー云々は端に除け、まずは基本的なことから確認する。俺と風間が所属しているのは《音楽部》。部活とは名ばかりの暇つぶしサークルだったが、一応音楽活動の真似ことは行っていた。

「キーボードのオレと、ベース兼ボーカルの風間。それと黒川絢葉」
風間の趣味で、演奏する曲は専らアニメソングか洋楽ロックの力ヴアー。どう考えてもメンバーが足りていない。

「はい。ドラムは打ち込みで我慢するとしてもギターがほしいってずっと嘆いてましたよね」

「ああ。その事は覚えている。4月からずっと言ってたからな。で、黒川さんってのは何の楽器なんだ？」

もしかしたら彼女の演奏している楽器の事を忘れているかもしれない。そう考え、尋ねる。

「フルートです」

わけがわからないよ。

どうして洋楽ロックを演奏するバンドにフルートが存在しているんだ。

「いや、まあ…。俺の知ってるバンドでもチエロとかやってる奴はいたからアリ…なの……か？」

いまいち釈然としないものを感じながら自分を無理矢理納得させる。ついでに《忘れ》た言葉はフルートでは無かった。

気を取り直して質問を続ける。

「じゃあ、次だ。変態ってのは？」

「ロック系バンドでフルートを担当して、僕っ娘で、『フッフ』と言う笑うので間違いなく中二病の変態です」

それは間違いなく中二病の変態だ。数年後に枕に顔を埋めてジタバタとするレベルだろう。

「実在したんだな。中二病って。黒川さんの交友関係を見てみたいぞ」

「兄さんです」

美鳥がポケットから手鏡を取り出し俺の顔を写す。

「…うわあ。認めたくねえ」

頭を抱える。心なしか頭痛がする。

それでもここで調査を止めるわけにはいかない。

眼鏡女の事が分かれば風間の居所も分かるかもしれないのだ。

眼鏡女は風間から連絡を受けたと言っていた。つまり、現在の手掛かりはその少女だけなのだ。

「それで、ストーカーって言うのは？」

一番の疑問。美鳥が叫んだ時も《ストーカー》と言う言葉に一番力が入っていた。

「《ある人》をいつも尾け回して背後に立ってるんです」

「…ある、人？」

「兄さんです」

俺かよ。

今朝の事を思い出す。校門をくぐった時、確かに俺の背後に立っていた。

「私の知っている事はこのくらいですね。直接話した事はほとんど

ないので」

「そう、か」

眼鏡女についての人隣りは大体分かったが、記憶が戻ると言うことはなかった。

一体何を《忘れ》ていると言うのだろうか。

「しかしアレだな。俺って後輩にスト キングされてたのか」

深く、嘆息。そう言えば七不思議の一つにも《スト キングする謎の幼女》と言うものがあつた気がする。

「兄さんは《顔だけ》は良いですからね」

「だけは余計だつての。今も後ろにいたりするんじゃないだろうな」
「いるよ」

「冗談でも恐ろしい事を言わないでほしい。」

「忍者じゃないんだぞ。そんな事あつてたまるか」

背後から聞こえた妹の冗談を笑い飛ばす。

「…」

背後…から？

気づけば、美鳥が怒りを越え、憎しみに満ち溢れた瞳で俺の背後を凝視していた。

とりあえずコンパスを放してほしい。二日連続で学校で殺人事件は笑えない。

ゆっくり、ゆっくりと後ろを振り返る。まるで壊れたロボットのようだった。

あまりに予想外の出来事が起きた時に同じような行動を取るあたり、やはり俺と美鳥は兄妹なんだな、と場違いなことを実感する。

「こんにちは。僕の《運命の人》」

案の定。

目に入ってきたのは朝に出会った眼鏡女。

熟練の職人の職人が作りだした人形のような美しさと、今にも崩れそうなガラス細工のような儚さを併せ持つ少女。

黒川絢葉だった。

第三話 俺と眼鏡とロクデナシな交友関係(3) (後書き)

ブラコンの妹はスト キングする同級生をみるとついコンパスを握りしめちゃうの。

ちょっと寝かせて見直したいので次回更新は火曜日

第三話 俺と眼鏡とロクデナシな交友関係(4)

突然だった。

《奴》は気配も感じさせず俺の背後に立っていた。

華奢で小柄な体格に、雪のように白い肌。

悪戯つばい微笑みを浮かべ、眼鏡の下のブラウンの瞳で俺を上目遣いで見つめていた。

背中までの三つ編みをゆらゆらと揺らしながら眼鏡女 黒川絢葉が口を開く。

「ふふつ。僕の事を探していたんだね」

「で、出ましたね。ストーカー！」

美鳥が敵意を露わにし、眼鏡女を威嚇する。

誰だって得体のしれない物には警戒するだろう。

だが、眼鏡女はあっさりと無視。

「こんな所で出会うなんて偶然だね。やっぱり運命を感じるよ」
…どうしよう。予想以上に変人だ。どう対応すればいいかわからない。

「ちょっと。無視しないで下さい！何で兄さんがあなたの事を探しているのを知ってるんですか！」

「僕は、天海先輩の事なら何でも知っている」

今にも掴みかからんばかりの美鳥を腕で遮り、制す。

体は美鳥を制止したが、頭は全く別の事を考えていた。

いや、考えるなんて高度なものではない。

俺は、完全に混乱していた。

意味が分からない。

眼鏡女は俺の何を知っていると云うのだろうか。

スト キング？後輩？

なら、どうして朝、俺に何も告げることなく煙のように消えた。

なら、どうして風間が学校に来ない事も知っている。

想像する。想像し続ける。だが、答えは全く出ない。

「不思議そうな顔をしているね。だったら教えてあげる」

眼鏡女が間を置く。

ほんの一拍。

「分かりやすく言えば、そうだね」

だが、今の俺にはその一拍すら数十秒の長さを感じられた。

「周囲の人に隠した恋人同士、つてところかな？」

眼鏡女が俺の腕に抱きつく。慌てて美鳥が引き離す。

俺は抵抗しない。抵抗どころでは無い。

訳が、分からなかった。

目まいが、した。

俺がこんな変人と恋人同士だと。

ありえない。ありえるわけがない。

だが

今朝の事がフラッシュバックする。

美鳥を《忘れ》た事。思いだす為の手掛かりがまったくつかめな

かった事。

そして、《忘れ》たことを知った時の、妹の涙。

《妹の事を忘れる俺が、恋人の事を忘れていないと断言できるのか》

頭の中を様々な思いが駆け巡る。

《狼狽》

《恐怖》

《疑念》

《罪悪感》

嘘と思いたい自分。嘘と言い切れる確証を持つ自分。彼女の言葉を信じてしまっている自分。

昼休みの教室だと言うのに周囲は静まり返っていた。

俺達の出す異様な雰囲気を感じ取ったのだろう。

静寂、ただそれだけが教室を覆っている。

「嘘ですっ!」

静寂を突き破ったのは美鳥の叫び声だった。

「兄さんには恋人はいません!私はそんな事を聞いていません!」
「フツツ。周囲に隠した、と僕は言ったよ。君が知らないのも無理はないかな」

眼鏡女の反論。筋は通っている。

もし俺が彼女と付き合っていたなら美鳥には言わないだろう。
兄離れ出来ない妹だから。きっと彼女の事も良く思わないに違いない。

「いいえ。ありえませんが。兄さんも何か言って上げてください。だって兄さんは」

語尾が少しずつ曖昧になっていく。

「兄……さん……は」

完全に、口ごもってしまう美鳥。

妹が何を口にしたいのか。俺には分かる。

そのお陰で、僅かだが迷いが払われた。

「何故なら」

美鳥の代わりに俺が続ける。

「俺は《記憶障害》だからだ」

「……！」

睨みつける様に見据え、口にする。

俺の言葉に眼鏡女が目を逸らす。同じ部活だ。知らないわけが無い。
い。

「俺は家族の事も《忘れ》るんだ。恋人を作っても、いつ相手の事を忘れるか分からない」

感情が高ぶった。気持ちを落ち着かせるため顔を伏せる。

美鳥の持っている手鏡が目に入る。

そこには、どうしようも無く惨めに歪んだ情けない男の顔が映っていた。

「そんな奴が恋人なんか作って良いわけが無いだろ！ただ、傷つけ

るだけだ」

「…やっぱり、駄目か」

眼鏡女が呟く。

拗ねたような、残念そうな、顔。

そこに敵意や悪意、悲しみは感じられない。

「今なら、天海先輩を騙して彼女になれると思ったんだけどな」

…。

…え。

ちよつと待て。

「すると何だ？もしかして」

非常に馬鹿馬鹿しい想像が頭に浮かぶ。

考えうる限り、何よりもくだらなく、

何よりも肩透かしで、

何よりも残念な結末が。

「君は 君は《俺に恋人と思いこますためにウソをついた》って
事か？」

「そうだけど？」

いけしゃあしゃあと言い放つ眼鏡女。

一気に俺の体の力が抜けるのを感じた。

美鳥がコンパスを強く握っているのが見える。止める。気持ちは
分かるが止める。

「ひ、卑怯と思わないんですか？兄さんの記憶障害を盾に取り、ウ

ソを教え恋人関係になるうだなんて！」

「そうでもしないとこれ以上距離を縮めれないと思ったから。気を悪くしたよね。謝るよ……」

俺達の刺すような視線に気づいたのだろう。申し訳なさそうな顔で眼鏡女がぺこり、と頭を下げる。

…俺の不安と疑念は何だったのだろうか。少しでも怯えていた自分が恥ずかしくなる。

「それで恋人関係になった後に記憶が戻ったらどうするんですか。嘘がバレて兄さんに嫌われちゃいますよ？」

「うっ」

眼鏡女が口ごもる。後先を考えていなかったのか。意外と抜けているのかもしれない。むしろアホだ。

「兄さんの事が好きなら正々堂々としてください！」

「正々堂々としたら認めてくれる？」

「認めません。絶対っ、絶対っ、絶対に！認めないと世界が滅ぶとしても認めません！」

謎のガールズトークを続ける二人を眺めながら、俺は全く別の事を考えていた。

眼鏡女の奇行の理由は分かった。

だが、風間が失踪した理由は未だに不明のまま。

そもそも当初の目的は、黒川絢葉から風間の情報を聞き出す事。ようやくスタート地点に立てそうだった。

「うふふふふ。やっぱり、黒川さんにはコンパスの餌食になって貰うしか」

「そこまでにしとけ」

壮絶な笑顔でコンパスを振り上げた美鳥の腕を掴む。当然の事だが目的は眼鏡女を倒すことではない。

「風間が学校を休むって、君が連絡を受けたんだよな？」

「そうだよ。部活も休みになるからって」

当然だろう。人が死んでいるのだ。

昨日の今日で音楽室が利用できるわけが無い。

「でも、本当だとは思わなかったかな。まさか殺人事件だなんて「殺人事件？」

兄は《殺人事件が事故の隠蔽が分からない》と言っていたはずだ。なのに、どうして？

「風間先輩が言ってたんだ。殺人事件が起きたからしばらく部活は休みだって」

どうやらあの探偵モドキがいい加減な事を吹き込んだらしい。

「まだ殺人かどうかは不明って話だ。憶測でモノを言うもんじゃない」

「ですけど、学校中は殺人事件が起きたと言っ話で広まっていますよ」
大衆が喰いつくような大きな話題。

図書館で俺が言った言葉が脳裏に浮かび、深く嘆息。

どいつもこいつも浮ついている。自分は関係無いとでも思っているのだろうか。

「まあいい。で、風間がどうして学校に来ていないのかは聞いているか？」

「うん。それなら、殺人事件の捜査をするって言ってたかな」

「そうか。なら…って、え？」

何か不吉な言葉を聞いた気がする。

不安になり、美鳥の顔を見る。聞き違いであってほしい。

だが俺の妹も、鳩が豆鉄砲を機銃掃射されたかのような顔をしていた。

「今、何て言った？」

「正確に言つと、『殺人事件の捜査をするから学校はサボるね。あ、ケージには黙っておいて』って」

「どうやら俺の身近にも浮ついた馬鹿がいたようだ。」

「『言わないで』って、言ってますよね」

「…あ」

「しまった、と言つ風にも口をふさぐ眼鏡女。もう手遅れだ。」

「今のはナシに…」

「なりませんね」

「なるワケ無いだろ…」

いくつか疑問は解決した。

謎の少女の正体。死んだ梶原の人隣り。

しかし、肝心の眼鏡女の記憶は取り戻せないまま。

その上、新たに頭痛の種を抱える事になってしまった。

風間祈衣が事件の捜査を行っている。

「心配…かけやがって」

死ね。あの馬鹿。

いや、やっぱり死ぬな。

神にでも仏にでも祈ってやる。

だから、何も起こらないでいてくれ。

無情にも昼休みの終了を告げるチャイムを全身に受け、俺は天井

を仰ぐ。

まだ、眼鏡女に聞きたい事は山ほどあると言つのに。

俺はただ、焦りを募らせるだけだった。

第三話 俺と眼鏡とロクデナシな交友関係 終

第三話 俺と眼鏡とロクデナシな交友関係（4）（後書き）

次回予告

失踪した祈衣は独自に事件の調査を行っていた。
未だに戻らない絢葉の記憶、増え続ける謎。

その日の夜、全ての謎は一応の終息を迎える。
だが、事件の終わりは《本当の始まり》でしかなかった。

次回、籠の中の記憶探偵第四話／日常編最終回

《事件の終わり、そして本当の始まり》に続く！

第四話 事件の終わり、そして本当の始まり

昼休み終了後、待っていたのは午後の授業ではなく緊急の全校集会だった。

風間が今どこで何をしているか分からない以上、俺達には何も出来ない。

眼鏡女にはまだ聞きたい事があったので放課後、再び合流する約束し交わし俺達は解散した。

全校集会の内容は予想通りの物。

梶原の死。殺人では無いので普段通りの生活を送れ。ただし、物騒ではあるので気をつけて帰れ、等。

その後、教室に戻った俺達は、プリントを配られた。

《梶原が何か悩んでいたようなことはなかったか》《14～16時頃に彼を見かけなかったか》《不審な人物はいなかったか》などの様々な項目。

無記名で回収されたプリントは恐らく警察に提出されたり、教育委員会への報告書の作成に使われるのだろう。

そして、放課後。

「さつきも言ったが、今日は部活も中止だ。道草せずに早く帰るよ
うに。それじゃ、解散」

副担任の蔵元の号令。担任は職員会議で席を外しているらしい。

眼鏡女の事を教えてもらう約束だったが、会えないのなら仕方なかった。

「まあ、もう眼鏡女は見つけてるからどうでもいいんだけどな」
「そうだね。例え《忘れ》ても僕らはずっと一緒だよ」
「ぼつり、と独りごちると後ろから声が聞こえた。
相変わらずの神出鬼没。黒川絢葉だった。」

「風間さんともあんなに仲が良いのにさらに下級生まで」
「これだからイケメンは…」
「爆発しろ…畜生。爆発しろ…！」
周囲からひそひそ声が聞こえるが無視をする。

「過去の契約通り、僕は来た。さあ、二人きりになれる場所まで行こう」

「残念。私もいますよ」
俺の手を取ろうとした眼鏡女だったが、横から飛び込んできた美鳥によって遮られる。

肩で息をしている所を見ると、よほど急いで来たのだろう。

「兄さんにある事無い事吹き込もうとしてもそうはいきませんからね！このコンパスに賭けて！」

美鳥が天井高くコンパスを掲げる。だからそれは文房具だ。本気で危険なので鞆にしまっておいてほしい。出来れば永遠に。

「…くつ。どこまでも僕の邪魔をするんだね。ならば僕の能力《深紅凍刃》の封印を…」

「ああ、もう。落ち着けお前ら！教室に残っていると怒られるからとりあえず移動するぞ」

このままでは收拾がなくなると思い、二人の間に割って入る。
「昼休みは中途半端で話が終わったからな。黒川さん、君にはまだ聞きたい事があるんだ」

「…勿論だよ。天海先輩の願いなら何でも聞こう。僕の全てに賭け

て」

《君》、と言った瞬間、ほんの少しだけ眼鏡女の眉間に皺が寄った、気がした。何かまずい事でも言ったのだろうか。

だが返す言葉は何も思いつかない。

「こつちだ。付いてきてくれ」

仕方なく、俺は当たり障りのない言葉でお茶を濁すことにした。

- - - - -

十六時三十分 私立平坂高校 中庭

「とりあえず目の前の懸案は二つだ」

「祈衣姉さんの行方と」

「僕に関する《忘れたことば》だね」

二人の答えに頷く俺。

教師の巡回があると思われる街中を避け、俺達は人通りのない学校の中庭に場所を移した。

「相変わらずあの馬鹿には電話は繋がらない。気づいたら連絡をよこせてメールは送ったけどな」

「風間先輩は一つの事に夢中になると周りが見えなくなるからね。」

恐らく、本当に電話に気付いていないんだと思うよ」

眼鏡女が楽観的な意見を口にする。

確かに、彼女の言う事も一理ある。しかし、もしかしたらと言うことも十分あり得るのだ。

「風間の居所に心当たりはないか？憶測でもいい」

俺には全く想像もつかない。

風間本人と違い、俺には想像力や展開力のようなものが欠如している所がある。

お陰で空気や顔色を読むと言うことが苦手で、よくトラブルに巻き込まれていた。

そんな男のストーカーだの友人だのと、眼鏡女や風間は変わり者だと思う。

「うーん。風間先輩の行動は全く予想できないかな」

「突飛ですからねえ。祈衣姉さん」

いきなりの手詰まり。どうしようもなかった。

全員が言葉を失い、うんうんと唸る。

唸った所で名案が飛び出ると言うことはなかったが。

「そうだ。それなら先に、天海先輩の記憶を取り戻すことから考えたらどうかかな？」

眼鏡女が提案する。

「それこそノーヒントだろ。《日記》にも何も書いてなかった」

ポケットから携帯電話を取り出し、フリーメモを開く。

図書室で梶原のニュースをメモしたように、俺はその日起きた印象的な事をメモする事に行っている。

もし用事や約束を《忘れ》ていたとしても、《日記》さえあれば次善の策が取れるからだ。

今は風間の事を優先すべき。

そう口にしようとした時、俺は袖口が引っ張られている事に気付いた。

引っ張っていたのは眼鏡女。俺の顔を真剣な眼差しで見つめていた。

「実は、正直なところ《忘れ》られたままなのはすごく寂しいんだ。今も、胸がズキズキする」

「涙を浮かべるくらい辛かったのに、それでも不思議キャラを演じてたなんて…」

筋金入りの中二病だった。

眼鏡女の性格はさておき、気持ちは分かる。《忘れ》られたままで平気な訳が無い。

「だったら、君の事を教えてくれないか？」

「僕の、こと？」

「嘘は抜きで、な。とりあえず入部の経緯、出会いから聞きたい。何か思いだせるかもしれない」

俺の言葉に眼鏡女が思案する。

おそらく出会いは4月。2か月近く前の事のはず。

普通なら思いだすのにしばしの時間が必要だろう。

だが、彼女は眼鏡の下の眠たそうな瞳を向け、即座に答えた。

「一目ぼれだよ」

《一目惚れ》。何の恥ずかしげもなくきっぱりと言い放つ眼鏡女。

「それで、気づいたら告白してたんだ」

「でも、振られたんですね」

「…うん」

理由は昼休みに話した通り。

《忘れ》る障害を持つ俺が、恋人の事を幸せにできるわけが無いから。

「兄さん、今日も私の事を《忘れ》ていましたから。断るのは、黒川さんを傷つけないための優しさなんですよ」

美鳥が諭すように言う。

「だけど、それでも僕は諦めれなかったんだ」

だから、同じ部活に入ったのか。

「《忘れ》るのが恐いなら、《忘れ》ても切れないような絆を作れ

ばいい、と思つて。もし、天海先輩が僕との思い出を全て《忘れ》たとしても、過去を塗りつぶすくらい楽しい思い出をたくさん作ればいいと思つて。だから、音楽部に入部したんだ」

《絆》 《思い出》。

優紀さんのと同じような事を言う。

病室のベッドで震える俺に、風間も似たような事を言っていた。

「…ったく。どいつもこいつも恥ずかしい事言いやがって」

「不本意ですけど、黒川さんの覚悟だけは認めてあげます」

「自分の気持ちに嘘をつく事は嫌いだからね。例え《忘れ》られた今でも、天海先輩が好きなのは変わらないよ」

好き、と言つ言葉に頬が熱くなるのを感じる。本当に恥ずかしい事を真顔で言う女だ。

思わず、苦笑いが漏れる。

俺の周りはお人よしばかりだ。

自分の気持ちに真っ直ぐな奴ばかりだ。

《忘れ》られて傷つくのは自分なのに。それでも彼女たちは俺の側にいようと言つのか。

「でも、どうしてそこまで兄さんに？」

美鳥が聞く。俺の前で出して良い質問では無い気がするぞ、妹よ。

「一目ぼれだから、説明は難しいんだけど…」

「一つでもいいんです。もしかしたら、《記憶》に関係してるかもしれませんし」

コンパスを握りしめていた様子からは想像もできないような真顔で美鳥が問う。

眼鏡女は、熟考するかのよう目を見伏せこめかみを叩く。

「もし、理由を聞いても刺したりしない？」

顔を上げ、眼鏡女が美鳥を見据える。

「しません」

二人は俺の事など目に入っていないように真剣な表情で見つめ合っていた。

「僕が、天海先輩に惚れた一番最初の理由、それは」

「それは？」

「ごくり、と息を呑むような音が聞こえた気がした。

正直、聞きたいようで聞きたくない。恥ずかしすぎる。

例えどのような事を言われても平静を保ったままでいよう。

そう、心に固く決める。

やがて、眼鏡女がゆっくりと口を開いた、

「顔」

顔かよ。

「帰るか」

「そうですね」

「ああんっ。一目ぼれなんだから仕方ないもん。理由なんて分からないよ！」

「引っ張るだけ引っ張って『顔』は無いだろ…。予想外にも程があるっの」

立ち上がろうとする俺達を慌てて引き留める。どうでもいいが素の部分が出ているぞ。

今日は緊張するだけさせておいて、拍子抜けするような出来事が多すぎる気がする。

そう言いながらも、彼女の瞳はうつすらと潤んでいた。
明らかな強がり。

「ありがとう…。ごめんな」

「実は兄さんの高感度アップを狙った発言だったりして
美鳥が穿った発言をする。まさかそんな事があるわけ

「ぎくっ」

「今、口で『ぎくっ』って言いませんでした!？」

「き、気のせいじゃないかな？」

「気のせいじゃありません!」

再び謎のガールズトーク、と言うより子供の言い争いが始まる。

「おい、やめろ。そんなに騒ぐと」

教師に見つかる。説教タイムはごめんだぞ。そう続けようとした
時。

「誰かいるの?…って、あれ。天海くん？」

案の定、見つかる。

特徴的な半音上げる語尾。声の主は俺の担任、朝倉だった。

「いや、すいません。ちょっと用事があった」

「いや、私も天海君のこと探してたし？」

探していた？

「1年の女の子を探してたんでしょ?もう、見つかったるみたいだ
けど」

そうだった。担任は眼鏡女について調べると約束してくれたのだ
った。

「彼女の担任の話だと、名前は黒川綾葉って、あれ？」

担任と眼鏡女の目が合う。そろり、と手を上げる眼鏡女。

「もう、見つけてた?へえー。クソ忙しい会議の合間を縫って調べ
てあげたのに?そっかー?」

「ギブ！ギブ！すみませんでした！反省してますから！許して！爆ぜるからっ。腕が爆ぜるからっ！」

全力の謝罪。彼女の細腕のどこにそんな握力があるのか。強化遣伝子でも組み込まれているのではないかと疑う。

何をされていたかは聞かないでほしい。思い出したくない。

「仕方ないから許してあげる？だけど今日は早く帰るように？寄り道は死刑よ？」

「分かってますよ。ほら、二人とも帰るぞ」

「はい」「うん」

手を挙げ、ついてくるように合図する。

仕方ない。続きは帰りながらも話すか。

俺たちが立ち去ろうと歩を進めた時、思い出したかのように担任が声を上げた。

「あっ、黒川さん？」

「えっ？」

「あなたの担任から伝言？」

担任の言葉に表情を変える眼鏡女。

「い、嫌な予感しかしないけど聞かせてもらっよ」

僅かだが冷や汗が滲んでいる。

どうしたのだろうか。見た目にそぐわず、意外に不良生徒だとか？

「『今日も遅刻しやがって。この《遅刻常習犯》っ！次に遅刻したらハリセンだからな！』とのこと？」

「ッ！」

頭に、疼きが走った。

《遅刻………常習……犯》？

「それは、手厳しいね」

「当たり前ですよ…。遅刻は駄目なんですから！」

美鳥達が何かを言っている。何かを話している。

何かを話しているのは分かるが、内容は全く入って来ない。

何故なら

何故なら　　！

何故なら　　！！

担任の《ことば》が

俺の《忘れ》てしまった記憶を

呼び醒ましたから

第四話 事件の終わり、そして本当の始まり（後書き）

続く。

第四話 事件の終わり、そして本当の始まり(2)

疼きからの頭痛。そして溢れ出る《記憶》。

頭の中で何万ものパズルのピースが渦巻いているかのような感覚。

何度経験しても慣れることのできない不気味な感覚。

《遅刻常習犯》 《遅刻》 《遅刻魔》 《パンを啜って走る少女》 《不良生徒》

日常の事、物語の事、取るに足らないどうでもいい事。

ありとあらゆる《遅刻常習犯》に関連した《言葉》が映像となり音となり俺の頭を蹂躪する。

その中には、昨日の放課後での出来事も含まれていた。

死体を発見した、音楽室での出来事が。

「文化祭まで後3カ月。部員もわずか3人なのにどうしよっか…」

「いや、どうしよっか…じゃねえだろっ!」

「しかも、もう一人の部員なんてまだ来てないし…」

「まあ、黒川は《遅刻常習犯》だからな。ってそうじゃない!死体だよ!死体!」

「そう、だ。遅刻常習犯…。《遅刻常習犯》だ…」

頭痛の波が引いて行くのを感じる。

頭が一気にクリアになるのを感じる。

俺は覚えている。思い出せる。

彼女と出会った四月のあの日。

彼女と過ごした部活の思い出。

それに、変人っぷりも、奇行も。

まるで昨日 いや、今日の事のように。

鮮やかに、鮮明に、一字一句漏らさずに、思い出せる。

出会ったその日に突然告白された事。

それを断った時の寂しそうな表情。

翌日、フルートを片手に入部届けを持ってきた事。

渋い顔をする俺たちを尻目に演奏しだした、アゲリル・ラウイーン洋楽のナンバー！。

余りの演奏の素晴らしさに、風間の瞳が感動のあまり潤んでいた事。

諸手を挙げて喜ぶ俺達。

だけど、すぐさま彼女が酷い中二病だと分かった事。

まあ、良いじゃん、と気軽な風間の笑顔。

よく、俺の後ろに潜んでいる事。

それに俺が気付いた時の、どこか嬉しそうな顔。

全部、全部覚えてる。

黒川絢葉の言葉一つ、しぐさ一つ、表情一つ。

今まで俺が見てきたこと、聞いてきたこと、何もかも全てを、俺は覚えている。

「どうしたんですか？兄さん」

どうして忘れていたんだろう。

「いや、何でも無い。大丈夫だ。早く帰るぞ」

黒川絢葉は、中二病で、ストーカーもどきで、

「はい…って、急に急に行かないで下さいっ」

どっしりよじも無い変人で。

「ああ、そうだ。物騒だから送っていく」

俺達と同じ部活の。

「構わないだろ？」

大切な

「…え？」

後輩だ。

「なあ、《黒川》」

歩を止め、振り返る。

振り返りはしたが、眼鏡女
来ない。

いや、黒川と目を合わせる事が出

何故かは分からない。だけど、今彼女の顔を見れば、泣いてしま
う気がしたから。

「うん…！」

黒川の声が震えているのが分かる。

今まで、彼女との思い出をいくつも《忘れ》てきたが、本人を完全に《忘れ》てしまったの初めてだった。

《忘れ》られる辛さも、思い出された時の安堵の大きさも相当なものだったのだろう。

涙を流しているかもしれない。

「何を《忘れ》てたのですか？」

居心地の悪い空気を崩そうと、美鳥が問いかけた。

「あー。《遅刻常習犯》」

周囲の三人が異口同音に「うわあ」と漏らす。

当然だ。《遅刻》ならまだしも《遅刻常習犯》。当日に思い出せたのが奇跡のような《ことば》だ。

「ああ。だから天海君、今日無断遅刻したんだ？今までそんな事なかったのに？」

担任の言葉に無言で頷く。恐らく、遅刻と言う概念そのものを《忘れ》てしまったのだろう。

だから罪悪感も無く、叱られた理由さえ分かっていなかった。

「難儀な体質ね？まあ相談があつたらいつでも乗るから、今日は帰りなさい？」

「ありがとうございます。ほら、行くぞ、二人とも」

俺が足を踏み出そうとした時

「待ってくださいー！」

美鳥から呼び止められる。

「黒川さんが…」

何が起きたというのだろうか。

慌てて振り返る。

目に飛び込んできたのは、膝を突きつづくまる黒川クロの姿。

「嬉しくて、腰が抜けたみたいだ。ごめん」

黒川が恥ずかしそうに、笑う。

「すぐ帰りたいのは山々なんですけど、ちょっと休んでいいですか？」

「はあ、仕方ないからオツケー？」

おそらく、黒川にとっては生まれて初めての衝撃だったのだろう。すでに何度も《忘れ》られている美鳥でさえ未だに涙を流すのだ。

「歩けるようになったら送って行くから。とりあえずじっとしてろよ。そう続けようとした時。」

俺の胸に振動が走った。

続けて、着信を伝えるメロディ。

有名な探偵アニメのメインテーマ。

スタッカートの利いた軽快なイントロが、人気のない学校に高らかに鳴り響いた。

「この曲……は……！」

風間の。風間祈衣からの電話だ。メールではない。間違いなく、彼女からの電話だった。

慌てて胸ポケットから携帯電話スマートフォンを取り出す。手が震えているのがわかる。

あいつは、一人で事件を捜査すると黒川に伝え

そして今朝、行方不明になった。

電話は本人からのものだろうか。

それとも、まさか。

「俺だ！どうしたっ？」

震える指で、通話ボタンを押すなり怒鳴りつける。
頼む。本人でいてくれ。

無事でいてくれ。

変わり者だが、迷惑なことばかりする女だが、それでも、それでも俺の友人なんだ。

神でも、仏でも、悪魔でもいい。

だから、全ては俺の杞憂であってくれ。

これ以上、俺から《記憶》以外のものを奪わないでくれ。

俺には、祈り、願うことしかできなかった。

第四話 事件の終わり、そして本当の始まり(2) (後書き)

短め。ごめんなさい。

第四話 事件の終わり、そして本当の始まり(3)

六月五日 午後九時三十分

天海家 リビング

「……どういうことだよ。説明しろよ」

責めるように、突き刺すように、俺が問う。

「落ち着いてください。兄さん！」

今にも掴みかからんばかりの俺を美鳥が引き留める。

俺は、少しだけ怒っていた。

彼女の身勝手さコイツに。

結論から言おう。

風間祈衣は、無事だった。

五時間前

「俺だ！どうしたっ」

突然の風間からの電話。

心配だった。不安だった。

だからこそ、語気が荒くなる。

高鳴る心臓、滲み出る手汗。

だが電話口から聞こえてきたのは、俺の緊張を嘲笑つかのような
能天気な声。

『あ、ケージ。どうしたの？すっごい着信来てたけど』

能天気な、風間の、風間祈衣の声。

「どうしたもこうしたも無えよ！何なんだよ。いきなり連絡取れなくなつて！こっちは心配してんだよ！」

安堵、狼狽、怒り、喜び。

さまざまな感情が渦巻き、制御できない。自然と口調が乱暴になる。

美鳥たちが電話の声を聞こうと顔を近づけてきているが、恥ずかしさを感じる余裕は無かった。

『ごめんね。ちょっと調べ物してて。ホントはケージにも言いたかったんだけど』

「調べ物？探偵ごっこのことか。クロから聞いてる。とにかく、無事なんだな？」

『無事だけど…もう、黒川ちゃんくろいたら。でね、ケージ』

風間の声のトーンが変わる。

明るい能天気な声から、真剣な冗談を許さない声に。

「何だよ。もう無事なら何でもいいよ。むしろ死ねよ。心配させやがって。この馬鹿。16回死ね」

今までで最大の肩透かしを喰らい、俺はもはや脱力感に襲われていた。

「何だよ」

『話したいことがあるからさ。9時ごろケージの家に行くね。全部話すから。言い訳にしかないかもだけど』

「話したいことって」

『あつ、電池が…。あとで 対に から！ごめ』

それきり、電話は切れてしまう。
かけ返しても留守番電話サービスに接続されるだけ。
おそらく、風間の言うとおり電池が切れたのだ。
俺が何十回も電話をかけたからに違いない。

「…何なんだよ。畜生。あの馬鹿。やりたい放題じゃねえか」
心配していた俺は何なのだろう。

神や悪魔にまで祈っていた俺が馬鹿みたいだ。
穴があつたら入りたい。あまりにも恥ずかすぎる。

結果的には黒川の言った通り。どうということは無い俺の杞憂だ
つたのだから。

「まあまあ。何にも無かったからいいじゃないですか」

「そう、だけども」

脱力感からようやく立ち直る。

「風間先輩だし。仕方ないよ。さあ、帰ろう」

「ああ。ちょっと黒川さん、何してるんですか!」

ようやく落ち着きを取り戻した黒川が俺の右手を引き、対抗する
ように美鳥が俺の左手を取る。

結局、何も無かった。

俺は黒川の記憶を取り戻し。風間は無事だった。

ただ気がかりなのは、風間が電話で言っていた《伝えたいこと》。

「…あの馬鹿が何か言う前に、絶対に俺が先に文句言ってやる」
そう決意し、俺は家路へとついたのであった。

九時三十分（現在）

「…どういうことだよ。説明しろよ」

開口一番。責めるように、突き刺すように、俺が問う。

「どついつこつって、探偵として」

「違う！どついつ黙って、勝手に、危険かもしれない事に首を突っ込んだか聞いてるんだよ。警察に任せればいいだろ？」

どついつこイツは俺の気も知らず勝手な真似ばかりするのだ。

学校に殺人犯がいるかもしれないのだ。

人殺しの異常者に関わったせいで、風間自身も殺されてしまうかもしれないのだ。

俺の心配をよそに、マイペースに振る舞うのだ。

「なあ。何でこんな馬鹿な真似をするんだよ。正直、俺は頭に来てるんだ」

突き放すように、言う。

風間は気の良い奴だ。8か月前、記憶障害の俺の為に家族と同じくらい親身になって接してくれた。

《俺が風間の記憶を失っている》にも関わらず。

《未だに、事故以前の風間の記憶を取り戻していない》にも関わらず。

マイペースで、変わった所もあるし、常識が無い所もある。

だけど、それでも、それでも俺の大切な友人なのだ。

明日には、俺は風間の事を再び忘れてしまうかもしれない。だからこそ、僅かでも危険の可能性がある事に踏み込んでほしくなかった。

だからこそ、キツイ言い方になってしまったのだ。

「…ごめんね」

風間が、目を伏せ謝罪する。

「でも、不安だったんだもん」

ちらり、と上目づかいに俺の方を見る。

他人の表情や感情を読むことが苦手な俺は、彼女の瞳を見ても何を考えているか分からない。

ただ、強い《意思》が込められている事だけは分かった。

「ケージが事件と関係していることを《忘れ》てたらって。それでまた何かトラブルに巻き込まれたらって。そう思うと居ても立ってもいられなくて」

「そんな訳無いだろう。心配し過」

「ふうん。じゃあ、今まで無かったとでも言うの？」

風間の口調が、謝罪の色から変化する。

責める口調でも無い。突き刺す口調でも無い。からかうような口調。

「カツアゲしたチンピラをノした事をすっかり《忘れ》ちゃって、30人と鬼ごっこすることになったりー」

「うっ…」

「放火現場を目撃した事を《忘れ》ちゃって、口封じのために殺されかけたりー」

「う、うぐっ」

今度は俺が黙る番だった。

風間の言う通り、《障害》を負ってからの俺はトラブルに巻き込まれっ放しだ。

その数、僅か半年で警察沙汰が4回。あまりにも多すぎた。

「心配するなって言う方が無理よ。だからあたしは調べてたの。ケージが事件に関係してないかどうか。関係してなければそれでいいし、もし関係があったら、怪しい人をピックアップして知らせようかと思って。そうすれば危険が減るでしょ？」

しばし呆然。頭の中が申し訳なささと恥ずかしさで真っ白になる。

風間の奇行は、奇行では無かった。

事件を調べていたのは、無意識のうちにトラブルに巻き込まれてしまう俺のため。

黙って捜査していたのは、俺に心配をさせないため。

風間の気持ちあいてを分かっていなかったのは俺の方だった。

彼女は俺の為に動いてくれていた。俺の事を心配し、彼女なりに動き、調べてくれてたのだ。

また、俺の知らないうちに周囲に迷惑をかけていた。気を使わせていた。

「負けですよ。兄さん」

今まで口を閉じていた美鳥が言う。

「祈衣姉さんに言うことがあるんじゃないですか？こんなに大事にしてくれてるんですから」

「わ、分かってる…！あの、アレだ。言いすぎた。悪かった。でも別に、そこまで気イ使わなくても良いんだからな。マジで」

「そう言う訳にも行かないわよ。ケージはあたしの命の恩人だし、幼馴染なんだから」

あっけらかんと言いつつ。

当たり前のように。あまりにも自然体に。俺自身が事故の事を《忘れ》ていることを感じさせない程に。

「それで、何を調べてたんですか？」

俺の心情を知ってか知らずか、興味津津と言った様子で美鳥が聞く。

「んー。目撃証言かな。梶原君と一緒にいた人とか、その近くにケージがいなかったかとか」

以前も述べたが、学校収集能力において風間の右に出る者はいない。

定期テストの点数、浮いた噂、喫煙事件の犯人。どうやっているのかは分からないが、平坂高校内の事で風間に調べられない事は無いと言っても良い。

「結論から言えば、ケージは多分無関係よ。しかも、それだけじゃ

なくともつとスゴいことも分かつちやっただの」

「…スゴい、事？」

「そ。《犯人候補》」

さらりと、衝撃的な発言が飛び出る。

俺の聞き違いだろうか。フィクションの探偵じゃあるまいし、普通の高校生にそんな事が調べられるわけが無い。

馬鹿馬鹿しいと一笑にふそつとする俺。

だが、美鳥は違った。夢見る子供のように目を輝かせていたのだ。

「は、犯人候補ですかっ？」

「そう、犯人候補よ！」

もしかして、俺の心配は建前で、本当は自分の好奇心の為に捜査してたんじゃないだろうな…？

やけにテンションの高い二人を目にし、俺は邪推せざるを得なかったのだった。

第四話 事件の終わり、そして本当の始まり(4)

「まず大事だと思ったのは、梶原君の遺体が事故か自殺か、殺人か
ってこと」

ぴしり、と人差し指を立て、推理アニメのような大仰な振る舞いで風間が語り始める。

確かに、彼女の言う通り、自殺や事故なら問題ない。

いくら俺がトラブルに巻き込まれやすいと言っても、自殺や事故死の死体関連でもめ事に巻き込まれたりはしないだろう。

「だけど自殺じゃない事は確定だったわ。昨日、彼の遺体を少し調べたけど、首が折れてたもん」

「ああ、兄貴も同じことを言ってた。警察が原因を調べてるって」
「うん。あたしも気になって学校で聞きこんでみたの」

欠席の連絡を入れたのに学校に来てたのか。担任に見つかったらどうなっていたことが。

「そしたらね、《とんでもない事実》がわかつちゃった」
「事実…ですか？」

「うん。《音楽室の死体》が《殺人じゃない》って事実」
にやり、と不敵に笑う風間。

一介の高校生がどうやって突き止めたのと言うのか。
徐々に、風間の話に引き込まれて行く。

「まず最初に聞きこんだのは3-A。梶原君のクラスよ。そしたら
ね、《奇妙な噂》を耳にしたの」

奇妙な、噂。

何だと言うのだろうか。気づけば、俺は呆れを通り越して興味を抱いていた。

「3-Aの生徒が立ち入り禁止のハズの屋上に出入りしてるって噂」

「その噂がどうしたんですか？音楽室の遺体と屋上にどんな関係が？」

「3-Aは特進クラス。難関国立大学や、薬学・医学部を目指す生徒が所属するクラスなのはもちろん知ってるわよね」

「ああ。国立文系には全く関係のない話だけだな」

「うん。勉強漬けのA組生徒がどうして屋上なんかになって思ったわ。だから直接聞いてみたの。A組の生徒に」

俺も、そして美鳥も無言で風間の話に聞き入っている。

俺達が話を理解しているか確かめるかのように間を置き、風間は続けた。

「少しだけ渋ってたけど、『口止めはされてないし』って言いながら話してくれたわ。一部の生徒が屋上で《ゲーム》をしていることを」

《ゲーム》。心の中で反芻する。

優等生が屋上で行うゲーム。よもやボードゲームや鬼ごっこなんて答えは期待していなかった。

俺の予想も出来ない《危険な何か》。

その《危険な何か》によって梶原正明が命を落としたと言つことは想像に難く無かった。

「まいにちまいにち勉強勉強。ストレスでもたまってたのかしらね。《ゲーム》の内容は過激も過激。とんでもない《度胸試し》だったの」

風間が一冊のノートを取り出す。

「ルールを明文化したものを写させてもらったわ。読んでみて」

「ああ。って、コレは…！」

思わず、声が漏れる。

3-Aの生徒が行っていたゲーム、度胸試し。

それは、ゲームと言つには余りに過激で、学校で行うには余りに

常識はずれ、いや、イカれた行為だった。

一つ、場所は音楽室と図書室がある第四校舎。理由は特殊教室をまとめた都合上、他の後者より高く作られており、屋上にいる事が見つかりにくいため。

二つ、《フィールド》は《屋上のフェンスの外側》。一歩足を踏み外せば間違いなく命を失う場所。

三つ、《プレイヤー》は命綱をつけ、屋上の端に立つ。

四つ、《プレイヤー》はフェンスを握ることなく、端から端までに到達するタイムを競う。

五つ、命の保証はしない。以上。

「こ、こんな事が学校であつたつてのわ!?」
信じられなかった。

どうして誰にも気づかれずにこれほど異常な事が行えたと言つのだ。

「冗談ですよわ?だ、だつて屋上に人がいたら普通気づくじゃないですか。だつて、平坂^{ウチ}高校つて、生徒だけで3000人もいるんですよ?」

美鳥も同じ気持ちだつたのだろう。明らかに動揺している。

「こんな都会に3000人もいるからこそ、つて言うのかな。校舎が密集してるせいで、屋上なんて見えないわよ。美鳥^{みっ}ちゃんの教室から隣の屋上つて見える?」

美鳥が首を振る。

俺も3年と数カ月平坂高校に在籍しているが、教室内から屋上が見えた記憶は無かつた。

「ケージ達が信じなくても事実よ。《プレイヤー》の証言もあるし。それでね、ここで2つの事実が重なるの」

「《首が折れた死体》と《屋上のゲーム》…ですか?」

消え入りそうな声で、美鳥が呟く。

「そう。ここからはあたしの想像よ。梶原君は《ゲーム》に参加中、うっかり足を踏み外した。そして、命綱が首に絡まり…命を落としました」

それで首の骨が折れていたのか。

命綱が何メートルあったのかは分からないが、数十キロの体重が一瞬で首に集中したのだ。へし折れていたとしても不思議ではない。そして、《ゲーム》の発覚を恐れたクラスメイトが自殺に見せかけ音楽室に運ぶ。

全て、つじつまが合った。

「事件は殺人なんかじゃなくて死体遺棄事件。ケージは関係無さそうね」

驚きが隠せなかった。

この女はやってのけたのだ。

本当に、フィクションの探偵のように、事件の真相を暴きだしたのだ。

「犯人は、わかったのか？」

彼女の推理を警察に話せば、一気に事件は解決に向かう。

ここまで来たら全てを聞いてやろう。

「さすがに1日で突き止められなかったけど、絞りこむことはできたわ」

「す、すごい…。容疑者は何人くらいいるんですか？」

尊敬のまなざしを送る美鳥。ウィンクで返す風間。

だが、風間が次に放った一言は俺の想像をはるかに超えた言葉だった。

「35人よ！」

そうか。35人か。

「…って、多すぎだろ！A組のほとんどの生徒じゃないか！？普通、推理漫画とかなら多くても8人くらいだろっ

本当に、この女は真面目な場面でもない大ボケを放つ。緊迫感と言うものを知らないのだろうか。

35人と言えば、ほぼ1クラス。つまり、A組の生徒の誰かと言うことくらいしか分かっていないではないか。

「何言ってるのよケージ。3000人から35人に絞り込んだだけでもすごくない？」

「確かに、それは凄いいけどよ。何か釈然としないって言うか」
ぶつぶつと呟く。

「まあいいや。とりあえず兄貴が警察に教えてやろうぜ。参考にはしてもらえるだろ」

「明日も聞き込みをして、犯人を絞り込まなきゃね」
能天気な風間が言う。

「やっぱりお前、好奇心を満たす為に捜査をしているだろ…」
「楽しそうですね。祈衣姉さん。よかったですら私もお手伝い」

「その必要は無いよ」

美鳥の声が、突然現れた声に遮られる。

澄んだ、高めのテノールボイス。
気配もなく現れた声に、慌てて振り返る俺。

「犯人は、もう分かっているからね」

リビングのドアに立っているのは男。

三十路を過ぎていると言うのに、まるで大学生のように若々しく、眼鏡の奥で常に柔和な笑顔を浮かべている俺の兄。

天海大鷹だった。

第四話 事件の終わり、そして本当の始まり(4) (後書き)

活動報告にて質問あり。答えていただければ今後の参考にさせていただきます。

第四話 事件の終わり、そして本当の始まり(5)

「犯人は、もう分かっているからね」

突然現れた兄。

そして、衝撃的な言葉。

俺達は、目を見開き黙るしか無かった。

「帰ってたのか」

絞り出すように声を出す。

時刻は午後十時半。

気づけば、風間と話し始めて1時間近くが経っていた。

「うん。話の邪魔をするのも悪いと思ってね」

柔和な笑顔を浮かべ、兄が俺達の囲んでいるダイニングテーブルへつく。

「それにしても、凄いね。祈衣ちゃんの推理、警察の捜査と完璧に一致してるよ」

「名探偵ですからっ」

びしい、と親指を立てる祈衣。

あまり調子に乗らせないで欲しい。

これ以上風間が増長する前に、俺は話題を逸らす事にする。

「で、犯人が分かっているってのは？」

「ああ、簡単だよ。警察が突き止めたんだ。明日には死体遺棄事件の容疑者、引っ張られると思うよ」

引っ張られる。逮捕されると言うことだろうか。

聞きなれない言葉に疑問符を浮かべる俺達。

余程おかしな顔をしていたのだろう。兄が笑いながら解説を始める。

「逮捕って決まった訳じゃないんだけどね。重要参考人として話を聞かせてもらって、容疑が固まったら逮捕。って形になると思う」

「すげえな。警察って」

「うう。警察に負けた」

何故か本気で悔しそうな声を出す風間を無視し、兄に質問を続ける。

「それにしても早すぎないか？風間が《ゲーム》の事を見つけてきただけでも驚きなのに、もう犯人が見つかっただなんて」

「現実なんてそんなものだよ。地道な捜査と聞きこみ。派手な事なんて何も無い。ちょっと拍子抜けかもしれないけどね」

「でも…」

美鳥が口を挟む。

「昨日事件が起きて、明日犯人が捕まるって、地道な捜査だなんて信じられません。どうやったんですか？まるで魔法か手品みたいですよ！」

もっともな疑問。

日本の警察が優秀だとは聞いている。

だが、普通の高校生である俺達には、あつという間に犯人までたどり着いた警察の能力が不思議だった。風間に至っては夢見る少女のように目を輝かせている。

「んー。簡単に言えば、遺留品とアリバイかな」

少しだけ思索し、兄が《魔法の種明かし》を始めた。

刑事ドラマの定番。意外と普通だ。

警察にしか無い特殊な《何か》を期待していたのだが。

「今、普通だなーって思ったでしょ？それが魔法なんだよ。慶次達

が遺体を見つけた時、犯人の痕跡らしきものはあった？」

発見現場を鮮明に思い浮かべる。

死体、紐。それだけだ。その他はいつもと変わらない音楽室だった。

「記憶力に自信はあるけど、さっぱりだ。風間は？」

「んー。分かんない」

自嘲気味の俺の言葉に風間が答える。

両手を投げ出して降参のポーズだった。

「そこでどんな痕跡も見逃さないスーパーヒーロー。鑑識の出番さ。指紋、髪の毛のDNA資料。衣類の屑、靴跡などの物証を洗い出す。彼らは髪の毛一本、指紋の一つも見逃さないよ」

「けど大兄さん、指紋って言っても音楽室なんだからいつぱいあるんじゃないですか？どれが事件に関係してるかなんて分かりつこないと思うんですけど…？」

「良い質問だね。確かに不特定多数の出入りする環境では特定は難しい。だから警察が重点的に調べたのは《被害者》なんだ」

被害者？

梶原の遺体を調べて何が分かると言うのだろうか。

仮に犯人の髪の毛が見つかったとしても、平坂高校の生徒は三千人。《ゲーム》の関係者だけでも30人以上いるのだ。日本の法律では容疑者でも無い人間から髪の毛を採取する権限は警察には無いと記憶している。

「ふふつ。慶次は今こう思ってるだろ？《令状も無しにA組生徒から髪の毛の採取は出来ないだろ？》って。その通りだよ。だからこそ《アリバイ》なんだ。

アリバイ…。

「あっ」

俺と美鳥が同時に声を上げる。風間は不思議そうに俺達を見てい

た。

「そうだ。アリバイだ。」

「学校で、プリントが配られました」

「プリント。全校集会の後に配られたプリントを思い出す。」

《梶原が何か悩んでいたようなことはなかったか》 《14〜16時頃に彼を見かけなかったか》 《不審な人物はいなかったか》 などの様々な項目。

予想はしていたが、やはりあのプリントは生徒からの目撃証言を参考にし、洗い出し、犯人をあぶり出す為のものだったのだ。

「なるほど。探偵も顔負けね。とてもじゃないけど勝てそうにないわ」

「そうやって絞り込んで、聞き取りをしてさらに絞りこんでいく。絞り込んだ相手と物証が一致すれば」

「ビンゴ って奴か」

「そう。解剖すれば細かい死亡推定時刻も分かる。それこそ10分単位でね。体温、胃の内容物、首に与えられたダメージ、生活反応どれもが新たな発見を呼び、興奮するんだ。ふふふふふ」

「気持ち悪い声を出すな。怖いから。」

俺達の冷たい目に気付かなかったのか、何事もないかのように兄が話を続ける。

「そして医者はくどが導き出した死亡推定時刻に前後する形での目撃証言と照らし合わせれば自ずと被疑者は見つかる。」

あとは、彼らから唾液なり血液なり髪の毛なりを採取するなり、自供を得るなりすればおしましさ。

「魔法なんていらぬ。技術と、根気の作業だからね」

説明を受けても、まるで魔法のようだった。

日本の重犯罪検挙率の高さも頷ける。

職人プロがそれぞれの仕事をこなし、協力することで導き出される犯

人達。

改めて自分の兄が誇り高い職業についている事を思い知らされた。

「それで、犯人は誰なんだ？」

「未成年だし、僕には守秘義務はあるから言えないんだ。だけど、明日にはA組から数人の生徒がいなくなってるはずだよ。安心していい」

「って事は、もう事件は終わり…って事か？」

あまりにも拍子抜けだった。

死体を見つけた恐怖を思い出す。

風間が行方不明になった不安を思い出す。

黒川の意味深かつ無意味な行動。そして《忘れ》た事への不安を思い出す。

何もかも、どれもこれもが事件とは無関係だったのだ。

「そう、終わり。数日中に逮捕状が出て、今月中に起訴される。来月には裁判が始まり、刑が決まる。慶次たちは何もなくていい。何にもおびえなくていい。お前の《記憶》に関するトラブルなんて一切ないし、平和が一番さ」

「うー。そうですけど、探偵の立場ってものが…」

「僕らがいる限り、現代日本に探偵は必要ないよ。大丈夫。祈衣ちゃんも安心して学校生活を送ればいい。それにもう11時過ぎてるし、帰らないと。あ、祈衣ちゃんを送ってあげなよ」

兄が俺に促す。

「え、あ、ああ。ほら。帰るぞ」

全てが終わった安心で呆然としていたようだ。妙な声が出てしまふ。

「探偵ごっこは終わりだ。もう、無理だけはしないでくれよ」

風間に手を差し伸べる。「来い」の合図。

「うん。ケージが安全って分かったしね。ごめんね、心配掛けて」
風間が手を握り返し、立ち上がる。

「ああ、約束だ」

そう、事件は終わったのだった。

- - - - -

翌日、A組の男子生徒二人が逮捕される。

面識が無く、名前すら覚えていない生徒だった。

俺の記憶障害の特性上、誰かの名前を《忘れ》ることは、もはや
日常ともいえる事なので気にする様な事は無い。

マスコミ報道に寄れば、死んだ梶原を含む三人はちよつとした問
題児。

梶原の死亡の経緯も、犯人逮捕の経緯も、風間の推理とそして警
察の捜査通り。

《ゲーム》中の事故によって命を落とした梶原を自殺に見せかけた
犯人。

《梶原の死亡前に一緒にいた》と言う目撃証言によって特定され事
情聴取。そして自供、逮捕。

そこには見た目が子供の小学生探偵も、名探偵の孫も、戯言使い
も、何も入り込む余地なんて無かった。

現実にはマンガやアニメのようなものではない。

首吊り死体があった所で、それは探偵の仕事ではなく警察の仕事
なのだ。

それに、首吊り死体なんて無くても、俺の周りにはトラブルがや

つて来る。

この記憶障害のせいで 《忘れ》たせいで知らない男に殴られたこともある。

その男は、自分の彼女を寝取られたと勘違いして俺のもとにやって来たと言った。

だが、俺は男も女もさっぱり覚えていなかったのだ。

結局、その時は周囲の人の助けがあつて思い出し、誤解を解くことが出来たのだが。

毎日がこんな感じのトラブル続き。何かを《忘れ》て、トラブルが起き、思い出すために情報を集める。今日で言うなら、黒川の事を《忘れ》た時のように。

まるで、手がかりを元に記憶を探す探偵物語ハニミンだ。

だけど、《忘れ》る《ことば》は日常に関するものなのだ。

そこにサスペンスやスリルが入りこむ余地はない。

推理小説としては三流以下。

三流以下のミステリ それで良いと思う。

恐怖も、危機も、謎も俺には必要ない。

大切な兄妹と、風間カゼマに黒川。かけがえのない友人と過ごす日常。何も無い事が幸せなのだ。

俺には、もう普通の人生を送ることはできない。

《記憶障害》のせいでまともな就職先は期待できないし、将来の道も限られるだろう。

だからこそ、今この瞬間。家族や友人と過ごす日常を大事にしたかった。

あまりに恥ずかしすぎて、絶対に口には出せないがそれが俺の本心。

残り半年強の高校生活。
騒がしいけど平和な日常。
そんな毎日がずっと続けばいいと思う。

もう、殺人事件も起きない。死体遺棄事件も起きない。
不安も、苦痛も、恐怖もない。
《非日常》は終わった。

俺は、帰ってきたんだ。

《日常》に。

籠の中の記憶探偵 終

- - - - -

六月十八日（約2週間後）
午後六時三十分 私鉄《平坂高校》駅 ホーム。

あまりの出来事に足が震える。

想像もしてなかった事に恐怖で歯ががちがちと鳴る。

冗談みたいな話だ。

嘘みたいな話だ。

「どづいつことだよ…」

「どづいつ事って、アタシにも分かんないわよ！」

「高校生探偵だろ！？どづにかしろよ！」

「兄さん！落ち着いてくださいっ！」

我ながら無茶苦茶を言っていると思う。

風間祈衣は探偵なんかじゃない。

それはオレが一番知ってるはずなのに。

だけど、すぎるしかなかった。

頼るしかなかった。

たった今、起きたとんでもない【出来事】のせいだ。

唐突だが。

たった今、オレは

殺されかけた。

籠の中の記憶探偵《事件編》に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9023y/>

CAGE - 籠の中の記憶探偵 - 《日常編》

2011年12月13日09時50分発行